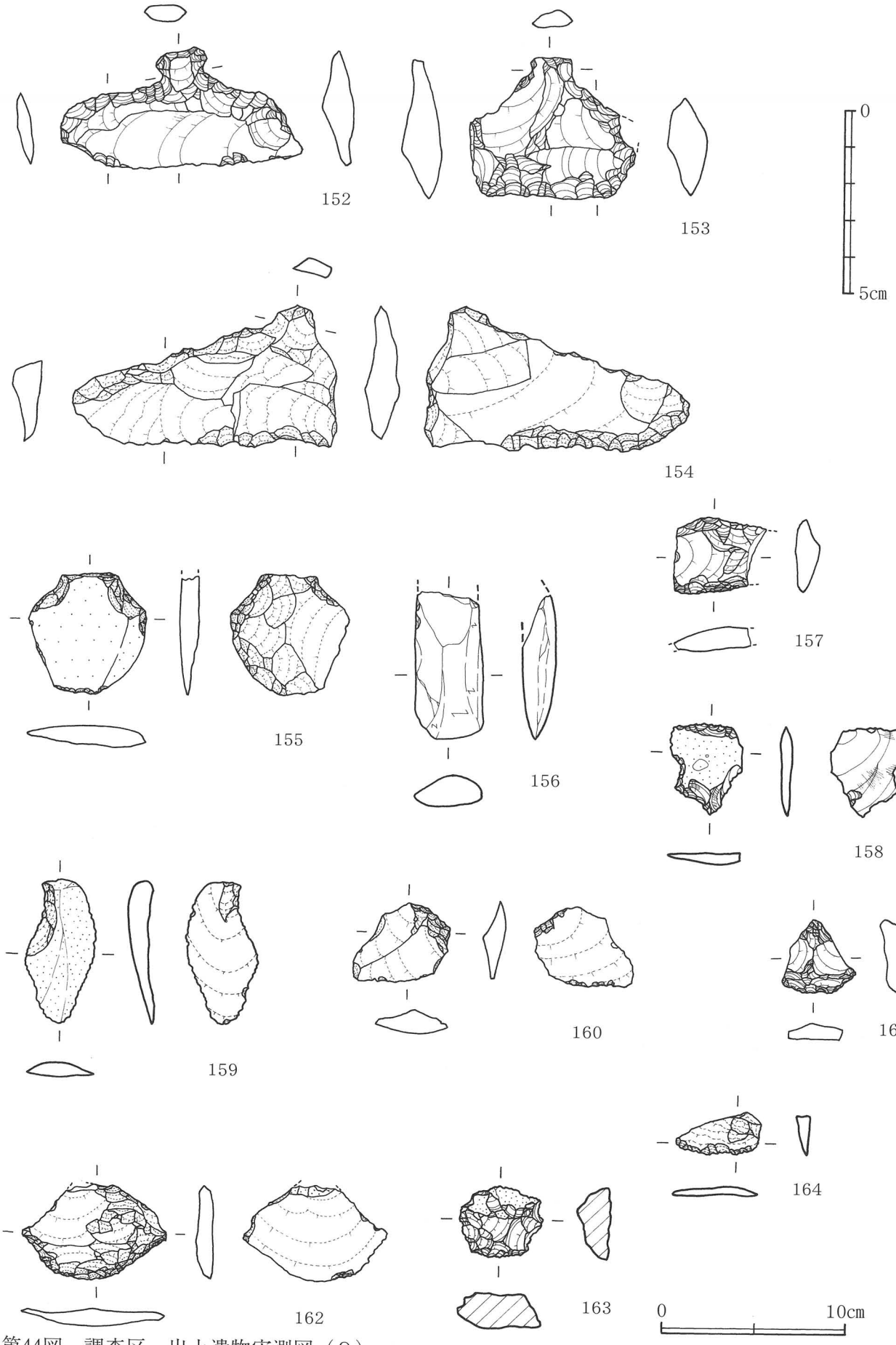
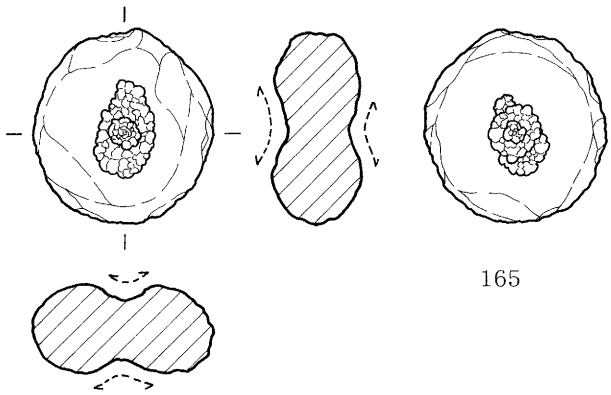
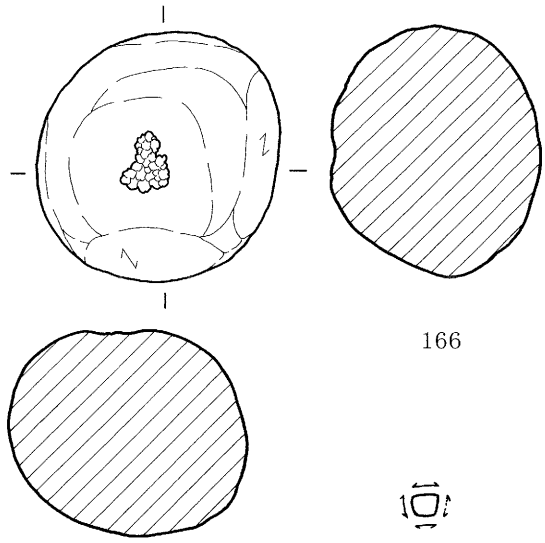


第44図　調査区　出土遺物実測図（9）

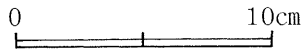
156・158：Ⅳa層，157：1351，160：4TreⅢc層，161：2TreⅢc層，162：1TreⅢc層

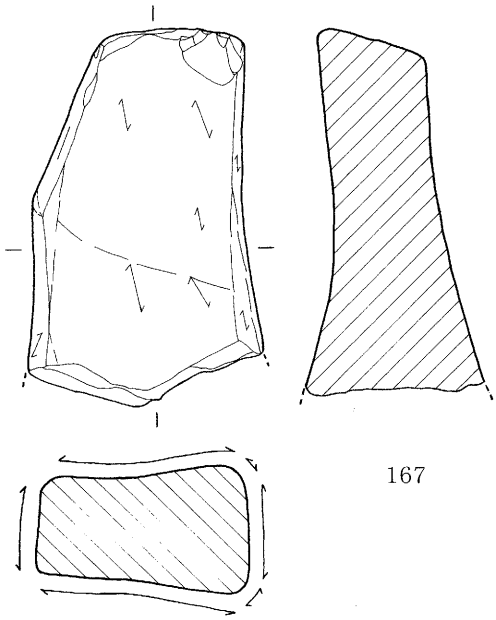


165

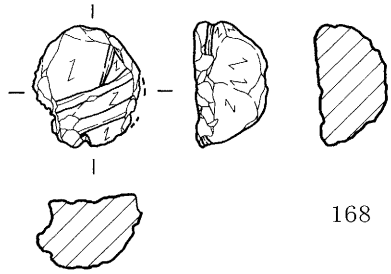


166

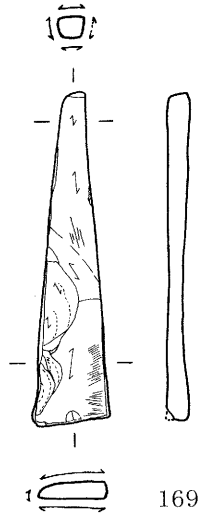




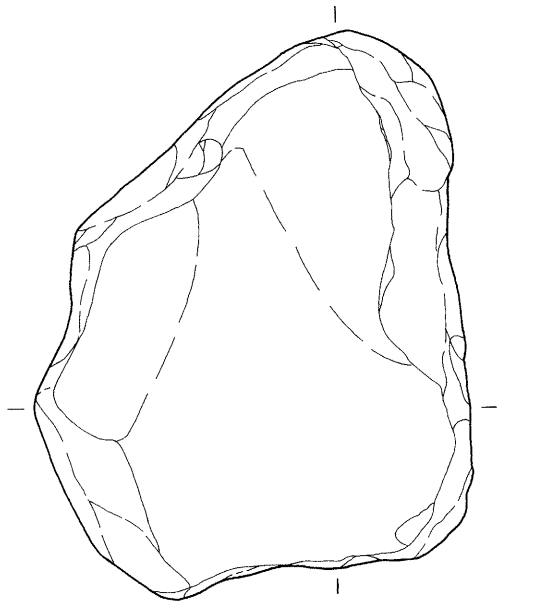
167



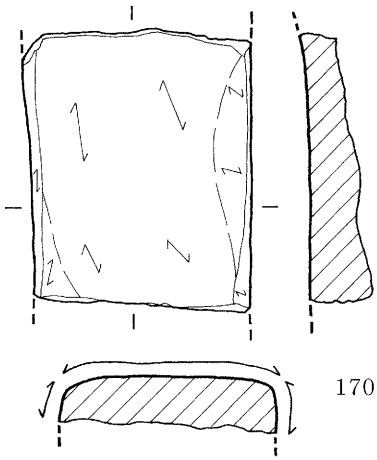
168



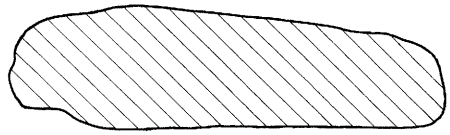
169

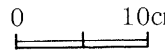


171



170





第45図　調査区　出土遺物実測図（10）

166・168：SK-28,169：916,171：SA-02

ＳＫ－97に西接する円形を呈する土坑である。規模は、径0.78m、検出面から床面までの深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－99

ＳＫ－98の東0.4mで検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.83m、短径0.57m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－103

ＳＫ－93の西７mで検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.95m、短径0.83m、検出面から床面までの深さ24cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－104

ＳＫ－103の西0.5mで検出された、円形を呈する土坑である。規模は、径0.68m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－112

Ⅱ区の西部で検出された、円形を呈する土坑である。規模は、径0.82m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－115（第34図）

規模は、0.84×1.15m、検出面から床面までの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－121

Ⅱ区の中央やや東側で検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.92m、短径0.65m、検出面から床面までの深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＫ－123

ＳＫ－121の南12mで検出された、楕円形を呈する土坑である。規模は、長径0.98m、短径0.83m、検出面から床面までの深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

出土遺物

Ⅲｃ層上面での遺構検出の際、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・中世国産陶器・輸入陶磁器・鉄器・石器が出土した。弥生土器は、甕の底部片が出土した。土師器は、甕の口縁部・底部片、壷の口縁部・底部片、鉢の口縁部・底部片、高坏の口縁部・脚部片、埦の底部片、皿やコップ型土器などが出土した。須恵器は甕と蓋の破片が出土した。土師質土器は皿が２点出土した。中世国産陶器は、擂鉢の口縁部が出土した。輸入陶磁器は、青磁の碗、白磁の碗・口禿げ皿・皿が出土した。鉄器は鉄鏃が２点出土した。石器は、ナイフ形石器、細石刃、打製石鏃・石鏃未製品、石匙・石匙未製品、扁平打製石斧・磨製石斧、スクレイパー、使用痕のある剥片、２次加工のある剥片、敲き石兼磨石、凹石、砥石が出土した。

第４節　小結

緩斜面上に位置する内牧遺跡は、比較的遺構の残りが良く、古墳時代から中世までの遺物と遺構が検出された。ナイフ形石器や細石刃が出土したが、旧石器時代の遺構は検出されなかった。また、縄文土器や弥生土器も出土したが、遺構は検出されなかった。

古墳時代は、竪穴住居が１基のみで、遺物の出土も少ないことから定住化しなかったと思われる。

古代以降になると、遺構が爆発的に増加する。遺構は、遺跡北側に集中して検出され、特に掘立柱建物は、北側に密集して検出されていることから、生活面は遺跡の北側であったと思われる。掘立柱建物は、主軸方位の方向で大きく、Ａ：主軸方位が北西～西北西方向、またはそれと直交するもの、Ｂ：主軸方位が西北西～西方向、またはそれと直交するもの、Ｃ：主軸方位が西～西南西方向、またはそれと直交するものの３つに分けられる。Ａは調査地の北東部に集中しており、Ｂは調査地の北部に散在してみられ、Ｃは調査地の北部にみられ、時期は、主軸方位が北西方向から西方向へ変化していくと思われることから、Ａ→Ｂ→Ｃと移行していくと考えられ、Ａには11～12世紀と思われるＳＢ－01が属することから11～13世紀が想定される。Ｂ・Ｃは不明であるが、Ｂ・Ｃともに、南接する古屋敷遺跡でＢ・Ｃと主軸方位が同方向の建物群があり、Ｂは12～14世紀、Ｃは15世紀以降と推定される。また、建物群の密集地の中央に当たる部分では、方形を呈する柱穴の２×２間の４面に廂を持つ掘立柱建物が検出されている。えびの市では、初の検出例で、その特殊性から拠点的集落であったと思われる。

表1　出土遺物観察表（1）　縄文土器・弥生土器・土師器・土師質土器・須恵器・中世国産陶器

No	出土地	種類	器種	法量(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
第36図 1	Ⅰ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	236	－	－	ナデ	ナデ消し	細砂を含む	やや良	暗褐～黒茶褐	褐～暗黄褐	
2	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ミガキ	－	砂を多く含む	やや不良	褐～暗褐	淡褐～暗黄褐～灰褐	両面：マメツ
3	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	－	細砂を多く含む	やや不良	暗茶褐～黒茶褐	暗褐～暗茶褐	外面：マメツ
4	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ消し	細砂を多く含む	やや良	暗茶褐～黒茶褐	褐～暗褐～暗黄褐	
5	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	－	ナデ	砂を多く含む	やや不良	暗褐～暗茶褐～褐	褐～暗橙	外面：マメツ
6	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	－	－	砂を多く含む	やや不良	褐～暗褐～黒褐	褐～暗褐	両面：マメツ
7	Ⅰ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	砂・金雲母を含む	やや良	褐～暗茶褐～黒茶褐	暗黄褐～暗茶褐	
8	Ⅲ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	砂を多く含む	やや不良	暗褐～暗黄褐～黒茶褐	黄褐～暗黄褐	両面：マメツ
9	Ⅱ～Ⅲ区 1Tre Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	細砂を多く含む	やや良	暗茶褐～黒茶褐	淡茶褐～暗黄褐	
10	Ⅱ～Ⅲ区 3Tre Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	工具ナデ	砂を含む	やや良	暗褐～暗黄褐～灰褐	淡褐～淡黄褐	
11	Ⅱ区 <1934>	縄文土器	深鉢	256	－	－	ナデ	ナデ	砂を多く含む	やや良	暗褐～黒茶褐	褐～暗褐～黒褐	
12	Ⅱ～Ⅲ区 3Tre Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	砂・白色粒を含む	やや良	淡褐～暗褐～黒茶褐	黄褐～黒茶褐	
13	Ⅱ～Ⅲ区 1Tre Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	細砂を多く含む	やや良	暗褐～暗灰褐	淡黄褐～暗灰褐～黒灰	
14	Ⅲ区 Ⅳa層	縄文土器	深鉢	192	－	－	ナデ	ナデ	細砂・白色粒を含む	やや良	暗褐～黒褐	淡黄褐～淡灰褐～暗褐～暗灰褐	
15	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	縄文土器	深鉢	－	－	－	－	－	細砂を含む	やや不良	褐～淡褐	淡褐	両面：マメツ
16	Ⅲ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ミガキ	砂を多く含む	やや良	淡黄褐～灰～淡灰	灰褐～淡灰	
17	Ⅰ区 Ⅲ層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	細砂を多く含む	やや良	暗茶褐～黒茶褐～黒褐	黄褐～暗黄褐	
18	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	砂・滑石を含む	やや良	暗褐～暗茶褐	暗褐～暗黄褐～暗茶褐～黒茶褐	
19	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	縄文土器	深鉢	－	－	－	ナデ	ナデ	砂を多く含む	やや良	褐～暗褐～黒茶褐	褐～明褐	
20	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～c層	縄文土器	浅鉢	246	－	－	ミガキ	ミガキ	細砂・白色粒を含む	やや良	淡褐～灰褐～黒褐	暗褐～黒茶褐～黒褐	外面：マメツ
第37図 21	Ⅰ区 SA-01	土師質土器	Ⅲ	132	103	33	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒を含む	やや良	褐～淡橙	褐～淡橙～淡灰	両面：マメツ 外面：糸切り
22	Ⅰ区 SA-01	土師質土器	Ⅲ	－	100	－	回転ナデ	回転ナデ→ミガキ	微赤微白色粒を少量含む	良	淡赤褐～白褐	白褐	外面：糸切り 内面：マメツ
23	Ⅰ区 SA-01	土師器	Ⅲ	－	94	－	－	－	赤色粒を少量含む	やや良	淡白褐	淡褐～淡白褐	両面：マメツ
24	Ⅰ区 SA-01	土師質土器	Ⅲ	62	57	18	－	ミガキ	細白色粒を微量含む	良	橙～淡褐	橙～淡褐	両面：マメツ 外面：糸切り
25	Ⅱ区 SA-02	土師器	鉢	143	－	50	－	－	赤・白色粒を含む	やや良	淡褐～灰褐	淡褐	両面：マメツ 丹塗り
26	Ⅱ区 SA-02	土師器	高坏	－	－	－	－	－	白色粒を含む	やや良	褐～赤褐	灰～褐	両面：マメツ 丹塗り
27	Ⅱ区 SA-02	土師器	甕（ミニチュア）	－	－	－	－	－	細砂を含む	やや良	黄褐～灰褐	黄褐～淡黄褐	両面：マメツ
28	Ⅰ区 SK-25	土師質土器	Ⅲ	69	50	16	回転ナデ→ミガキ	ミガキ	細赤色粒を少量含む	やや良	淡褐	淡褐	外面：糸切り
29	Ⅰ区 SA-01	中世国産陶器	擂鉢	－	－	－	－	－	砂・白色粒を含む	やや良	白褐～淡黄褐～淡橙	白灰～淡黄褐	両面：マメツ
30	Ⅰ区 SK-25	須恵器	壷	－	－	－	平行タタキ	粗ナデ消し	微細砂・赤色粒を含む	良	灰～黒灰	淡灰～淡青灰	
31	Ⅱ区 SK-28	中世国産陶器	火鉢	318	－	－	工具ナデ	ナデ	細砂・赤白色粒を含む	やや良	淡黄褐～白褐～灰褐～褐～黒褐	淡黄褐～褐～白褐～淡灰～灰褐	両面：マメツ
32	Ⅰ区 SK-28	中世国産陶器	火鉢	－	224	－	ナデ	粗ナデ	細砂・赤白色粒を含む	やや良	淡黄褐～暗黄褐～褐～灰褐	褐～淡黄褐～淡灰黄褐～淡灰～灰	
33	Ⅰ区 SD-03	土師質土器	Ⅲ	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	細赤色粒少量	良	淡褐	白褐～褐	糸切り
35	Ⅰ区 SK-33	土師器	Ⅲ	－	－	－	回転ナデ	－	微砂少量	やや良	褐～晴黄茶	淡白褐	内面：マメツ
36	Ⅰ区 SD-03	黒色土器	埦	－	71	－	回転ナデ	ミガキ	微細砂を含む	やや良	淡褐～淡橙～淡赤褐～暗灰	黒灰～灰	外面：マメツ
37	Ⅱ区 1817,1818	土師器	甕	178	－	－	ナデ	ハケ	砂・赤色粒を含む	やや良	褐	褐～暗橙～淡褐	
38	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	弥生土器	甕	－	60	－	ハケメ～ナデ～ミガキ	粗ミガキ	砂・赤色粒を多く含む	やや良	褐～黄褐～灰黄褐	暗褐～暗灰黄褐	外面：マメツ
39	Ⅲ区 Ⅲc層	土師器	甕	－	87	－	ナデ→粗ナデ	ナデ	砂を含む	やや良	暗褐～褐	暗橙	
40	Ⅱ区 <1601>	土師器	壷	112	－	－	ナデ	－	細赤色粒を少量含む	やや良	淡褐～白褐	淡褐～白褐	両面：マメツ
41	Ⅰ区 SB-39	土師器	壷	116	－	－	－	－	細赤色粒を含む	良	浅黄	褐	両面：マメツ
第38図 42	Ⅱ～Ⅲ区 5Tre	土師器	鉢	130	－	49	－	－	赤・白色粒を含む	やや良	暗赤褐～褐	褐～白褐～灰	両面：マメツ 丹塗り
43	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	土師器	壷	82	－	－	ナデ	ナデ	赤・白色粒を含む	やや良	淡褐～黒褐	淡褐～灰褐	
44	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	土師器	鉢	－	66	－	ナデ	ミガキ	砂・赤白色粒を含む	やや良	淡褐～灰	灰～黒褐色	外面：マメツ 器面剥離
45	Ⅰ区 <802>	土師器	高坏	118	－	－	－	回転ナデ	砂・赤色粒を含む	やや良	褐～橙	褐	両面：マメツ
46	Ⅲ区 Ⅲc層	土師器	高坏	240	－	－	ナデ～ミガキ	ミガキ	細砂・赤・白色粒を含む	やや良	褐～淡褐	明褐～褐～淡褐～灰～黒灰	内面：マメツ
47	Ⅲ区 <1916>	土師器	高坏	－	－	－	ナデ→ミガキ	ミガキ	赤白色粒を含む	やや良	橙～暗褐	灰～暗褐	
48	Ⅰ区 SB-18	土師器	埦	108	－	－	回転ナデ→ミガキ	回転ナデ→ミガキ	細赤色粒を含む	良	褐	褐	
49	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	土師器	高坏	152	－	－	－	－	砂・白色粒を含む	やや良	褐	褐～明褐	両面：マメツ
50	Ⅰ区 <1176>	土師器	埦	144	66	42	回転ナデ～粗ナデ	回転ナデ	細赤細白色粒を微量含む	良	灰褐～淡褐	灰褐～淡褐	内面：マメツ
51	Ⅰ区 Ⅲa～c層	土師器	埦	144	－	－	回転ナデ	－	赤色粒を少量含む	やや良	淡灰～淡白褐	淡白褐	内面：マメツ
52	Ⅱ区 <1600>	土師器	埦	120	61	53	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒を含む	やや良	褐～浅黄	淡浅黄	両面：マメツ
53	Ⅰ区 <1218>	土師器	埦	－	70	－	－	－	砂・細赤色粒を少量含む	やや良	褐～淡白褐	褐～淡白褐	両面：マメツ

表2　出土遺物観察表（2）　土師器・土師質土器・須恵器・中世国産陶器

No	出土地	種類	器種	法量(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
第38図54	II区 <1880>	土師器	埦	−	73	−	回転ナデ～粗ナデ	回転ナデ→ミガキ	砂を含む	やや良	褐～暗茶褐	暗茶褐	
55	I区 III層	土師器	埦	−	63	−	回転ナデ～ナデ	−	白色粒を含む	やや良	淡浅黄	淡浅黄	内面：マメツ
56	I区 IIIa～c層	土師器	埦	−	70	−	回転ナデ	−	砂・白色粒を含む	やや良	橙～淡赤褐	暗褐～褐	内面：マメツ
57	II区 SB-50	土師質土器	皿	130	96	34	回転ナデ	回転ナデ	赤・白色粒を含む	やや良	淡褐～褐	淡褐～褐	糸切り
58	I区 SB-35	土師質土器	皿	52	40	15	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒を少量含む	良	灰～灰褐	灰～灰褐	糸切り
59	I区 SB-71	土師器	皿	74	74	17	−	−	砂・細赤色粒を含む	やや良	淡褐	淡橙～暗褐	両面：マメツ
60	II～III区 IIIa～c層	土師器	コップ型	−	37	−	−	−	砂・白色粒を含む	やや良	浅黄	暗浅黄	両面：マメツ
61	II区 IIIc層	土師器	脚台	−	−	−	−	粗工具ナデ	砂・赤色粒を多く含む	やや良	明褐～褐	茶褐～褐～灰	器面剥離 外面：マメツ
62	II区 <1415>	須恵器	壷	−	−	−	平行タタキ	粗ナデ消し	微細砂・白色粒を含む	良	暗黄褐～暗褐～淡青灰～淡灰	淡黄褐～淡灰青褐	
63	III区 IIIc～IVc層	須恵器	甕	−	−	−	格子タタキ	ナデ消し	微細砂・白色粒を含む	良	淡青灰～暗灰	淡青灰～淡灰	
64	I区 <337>	須恵器	埦	−	77	−	回転ナデ	回転ナデ	細砂を多く含む	良	暗灰～淡灰	淡青灰～淡灰～灰	
65	I区 IIIa～IIIc層	須恵器	蓋	−	136	−	−	回転ナデ	細砂・白色粒を含む	良	淡灰～灰～淡黄褐	淡灰～淡黄褐	外面：マメツ
第39図66	I区 III層	中世国産陶器	擂鉢	296	−	−	回転ナデ	回転ナデ	砂礫も含む	良	淡赤灰～淡青灰～暗褐	淡赤灰～暗褐～褐	
67	I区 <906>	中世国産陶器	火鉢	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	細砂・赤白色粒を含む	やや良	黄褐～淡黄褐	褐～黄褐～淡黄褐	両面：マメツ

表3　出土遺物観察表（3）　陶磁器

No	出土地	種類	器種	法量(mm) 口径	底径	器高	調整・紋様	露胎	胎土色	釉調 外面	釉調 内面	産地	年代・備考
第40図72	I区 SK-28	青磁	碗	152	−	−		−	淡灰白	オリーブ灰	オリーブ灰	龍泉窯	14c末～15c中
73	I区 SK-27	青磁	碗	172	62	60	鏑蓮弁文	畳付き～高台内面	淡灰～灰白	淡オリーブ灰	淡オリーブ灰	龍泉窯	13～14c前
74	I区 SK-27	青磁	碗	166	46	69	剣先蓮弁文	畳付き～外底	淡灰～灰白	淡オリーブ緑	淡オリーブ緑	龍泉窯	14～15c
75	I区 SB-73	青磁	碗	158	−	−	−	−	灰～淡褐	淡オリーブ	淡オリーブ	龍泉窯	14末～15c中
76	I区 SB-73	青磁	碗	176	−	−	−	−	淡灰	オリーブ灰	オリーブ灰	中国	14後～15c中
77	I区 SB-11	青磁	碗	148	−	−	漆継痕	−	淡灰白	淡オリーブ	淡オリーブ	龍泉窯	14c後～15c初
78	I区 SK-27	青磁	袋物か	−	−	−	−	−	淡褐	白～青	白	龍泉窯	翡翠釉　16c
79	I区 SA-01	白磁	碗	148	−	−	−	−	白～白褐	乳白	乳白	中国	12～13c
80	III区 IIIc層	白磁	碗	−	71	−	−	外面下半～外底	白～白灰	乳白	透明	中国	12～13c
81	I区 <715>	白磁	碗	−	61	−	−	外底	白	透明	透明	中国	14c
82	II区 <1625>	白磁	口禿げ皿	−	−	−	−	−	白	淡乳青白～乳白	淡乳青白～乳白	中国	13～14c
83	I区 <243>	白磁	口禿げ皿	108	−	−	−	−	白	乳白	乳白	中国	13～14c
84	I区 IIIc層	白磁	口禿げ皿	114	−	−	−	−	白	乳白	乳白	中国	13～14c
85	III区 IIIa～c層	白磁	口禿げ皿	112	66	30	−	−	白	乳白	乳白	中国	13～14c
86	I区 <249>	白磁	皿	−	42	−	−	−	白	乳白～半透明	乳白～半透明	中国	14～15c

表4　出土遺物観察表（4）　鉄器・鉄製品

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	材質	備考
第37図34	I区 II層 SK-28	鉄鏃	(52)	14	4	−	鉄	
第39図70	II区 III～IVa層	鉄鏃	(38)	20	2	−	鉄	

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	材質	備考
71	II～III区 IIIc層	鉄鏃	(32)	8	2	−	鉄	

表5　出土遺物観察表（5）　土製品

No	出土地	種類	器種	法量(mm)	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	備考
第39図68	I区 IIIa～c層	土師器	布痕土器	−	−	−	1mm大の赤褐色粒を含む	やや不良	黄褐～暗黄褐	淡赤褐～褐	
69	I区 <564>	土師器	土錘	長:(49) 幅:(16) 孔径:(4)	ナデ	ナデ	微細砂を含む	やや良	灰褐～灰黄褐	−	−

表6　出土遺物観察表（6）　石器・石製品

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	石材	備考
第41図 87	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	ナイフ形石器	40	14	7		チャート	
88	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	細石刃	18	8	2		黒曜石	
89	Ⅰ区 Ⅲ層	石鏃	23	19	5	1	チャート	
90	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	24	16	5	2	チャート	
91	Ⅰ区 <1265>	石鏃	15	14	1	－	チャート	
92	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～c層	石鏃	14	15	3	－	黒曜石	
93	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(13)	(9)	(3)	－	黒曜石	
94	Ⅱ～Ⅲ区 4Tre Ⅲc層	石鏃	12	14	3	－	鉄石英	
95	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	17	17	6	1	黒曜石	
96	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	16	14	13	－	黒曜石	
97	Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	石鏃	18	12	3	－	安山岩	
98	Ⅰ区 <54>	石鏃	21	25	3	－	チャート	
99	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲ～Ⅳa層	石鏃	13	14	3	－	黒曜石	
100	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲ～Ⅳa層	石鏃	18	16	4	－	黒曜石	
101	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	21	16	4	1	チャート	
102	Ⅰ区 Ⅳa層	石鏃	26	(14)	4	1	チャート	
103	Ⅱ区 Ⅲ～Ⅳa層	石鏃	(26)	18	4	1	安山岩	
104	Ⅰ区 Ⅲ層	石鏃	18	16	4	－	チャート	
105	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(11)	(12)	3	－	チャート	
106	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(18)	(15)	4	－	チャート	
107	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	23	17	3	1	チャート	
108	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(20)	(14)	3	－	チャート	
109	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(19)	(15)	4	－	黒曜石	
110	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(18)	(13)	3	－	黒曜石	
111	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	15	15	3	－	チャート	
112	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	20	15	4	1	黒曜石	
113	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	18	16	3	－	安山岩	
114	Ⅰ区 Ⅲ層	石鏃	25	14	3	1	黒曜石	
115	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	(17)	(12)	3	－	安山岩?	
116	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	15	15	4	－	黒曜石	
117	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	15	15	3	－	黒曜石	
118	Ⅱ区 <1935>	石鏃	16	15	2	－	玉髄	
119	Ⅲ区 Ⅲc層	石鏃	(22)	(16)	4	1	黒曜石	
120	Ⅰ区 Ⅲc層	石鏃	(23)	(13)	3	－	玉髄	
121	Ⅰ～Ⅱ区 Ⅲc～Ⅳa層	石鏃	29	18	3	1	チャート	
122	Ⅰ～Ⅱ区 Ⅲc～Ⅳa層	石鏃	(13)	13	3	－	チャート	
第42図 123	Ⅰ区 Ⅲc層	石鏃	(14)	(13)	3	－	チャート	
124	Ⅰ～Ⅱ区 Ⅲc～Ⅳa層	石鏃	(14)	16	3	－	黒曜石	
125	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～c層	石鏃	27	14	4	1	チャート	
126	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石匙	29	(30)	5	3	チャート	
127	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石鏃	(21)	(14)	3	－	チャート	
128	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	石鏃	(23)	(13)	4	1	チャート	
129	Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	石匙	31	46	7	9	チャート	

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	石材	備考
130	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	石鏃未製品	17	16	4	1	チャート	
131	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～c層	石鏃未製品	(22)	(15)	5	1	安山岩?	
132	Ⅱ区 Ⅲ～Ⅳa層	石鏃未製品	23	15	7	2	黒色頁岩	
133	Ⅰ区 Ⅲ層	石鏃未製品	(16)	19	6	2	黒曜石	
134	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石錐	34	18	7	5	チャート	
135	Ⅰ～Ⅱ区 Ⅲc～Ⅳa層	石匙未製品	38	23	7	4	チャート	
136	Ⅱ区 SA-02	石匙	36	(50)	8	11	チャート	
137	Ⅲ区 Ⅲc層	石匙	51	28	9	14	チャート	
138	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲ～Ⅳa層	石匙	42	(68)	7	20	白色頁岩	
第43図 139	Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	石匙	62	35	14	20	チャート	
140	Ⅱ～Ⅲ区 5Tre	石匙	27	45	5	5	黒色頁岩	
141	Ⅰ区 SA-01	石匙	35	40	7	8	チャート	
142	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石匙	30	40	5	5	チャート	
143	Ⅱ～Ⅲ区 1Tre Ⅲc層	石匙	23	31	7	4	チャート	
144	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石匙	39	(55)	7	12	チャート	
145	Ⅰ区 Ⅲc層	石匙	29	44	6	6	チャート	
146	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲ～Ⅳa層	石匙	44	46	10	17	チャート	
147	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石匙?	33	20	11	7	黒曜石	
148	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石匙	24	42	6	5	チャート	
149	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石匙	27	18	7	3	チャート	
150	Ⅰ区 Ⅲc層	石匙未製品	48	18	8	5	チャート	
151	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～c層	石匙未製品	(44)	44	7	14	チャート	
第44図 152	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	石匙未製品 (特に刃部)	34	66	9	13	チャート	横長剥片
153	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石匙未製品	39	(44)	11	17	チャート	
154	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	石匙未製品か 石鋸	71	39	10	22	安山岩	
155	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲa～Ⅳa層	扁平打製石斧	(66)	(64)	11	50	砂岩	
156	Ⅰ区 Ⅳa層	磨製石斧	(80)	38	28	72	凝灰質頁岩?	
157	Ⅱ区 <1351>	刃器	(49)	41	15	27	チャート	
158	Ⅲ区 Ⅳa層	2次加工のある剥片	25	20	3	1	黒曜石	
159	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc～Ⅳa層	使用痕のある剥片	77	37	12	28	砂岩	
160	Ⅱ～Ⅲ区 4Tre Ⅲc層	使用痕のある剥片	43	53	12	21	頁岩	
161	Ⅱ～Ⅲ区 Ⅲc層	スクレイパー	41	40	12	16	チャート	
162	Ⅱ～Ⅲ区 1Tre Ⅲc層	スクレイパー	(52)	78	10	37	安山岩	
163	Ⅰ区 Ⅲa～c層	スクレイパー	45	39	19	31	黒曜石	白浜産
164	Ⅰ区 Ⅲc層	スクレイパー	46	22	8	6	頁岩	
第45図 165	Ⅰ区 Ⅲa～c層	凹み石 (敲き石)	77	70	36	226	加久藤溶結安山岩	かなり風化
166	Ⅰ区 SK-28	敲き石兼すり石	104	95	81	1200	加久藤溶結安山岩	
167	Ⅰ区 Ⅲa～c層	砥石	(149)	(93)	(70)	1200	砂岩	
168	Ⅰ区 SK-28	砥石?	49	(42)	30	17	軽石	
169	Ⅰ区 <916>	砥石	132	31	7	40	泥岩	
170	Ⅲ区 Ⅲc層	砥石	(112)	(89)	(25)	402	砂岩	
171	Ⅱ区 SA-02	台石	443	343	84	2200	加久藤溶結安山岩	

第6章　まとめ

手仕山・古屋敷・内牧遺跡からは、旧石器時代から近世までの多量の遺物が出土し、縄文時代から近世までの遺構も多数検出された。特に９～15世紀にかけての集落としては市内でも屈指の遺跡であることが確認された。住居の変遷を追って遺跡の特徴を考えてみたい。

縄文時代

早期から晩期までの遺物が出土しており、特に手仕山遺跡では、早期の遺物が多量出土した。しかし、東部丘陵平坦面で後期もしくは晩期の竪穴住居が３基検出されたのみであることから、居住空間というよりも、活動空間であったと思われる。

弥生時代

南部緩斜面と東部丘陵平坦面上に間仕切り住居が営まれる。住居数が少ないことから定住化には至らなかったと思われる。石包丁が出土していることから西から南にかけての緩斜面上で水田が営まれていたと想定される。

古墳時代

主に南部緩斜面と東部丘陵平坦上に竪穴住居が営まれ、住居数が多くなることから定住化に至ったと想定される。また、24号住居からは金銅製の帯金具もしくは馬具が出土していることから拠点的集落であったことが想定される。

古代Ⅰ期

北部緩斜面、南部緩斜面、東部丘陵に竪穴住居が短い期間であるが営まれ、掘立柱建物がこの地区に建てられ始めた時期である。掘立柱建物は、主軸方位が西北西～西、北北東～北方向の建物群で構成され、南部緩斜面上に集中しており、東部丘陵南東隅に若干みられる。建物の重複から３小期に分けられる。時期は、85号建物の柱穴から建物廃棄後に埋められた「鷹」の字を記された墨書土器が出土していることから、９世紀後半～10世紀と思われ、また、その墨書土器に記されている「鷹」の字から、養鷹・鷹狩と関わりある有力者の存在が窺え、この時期は拠点的集落であったことが想定される。

古代Ⅱ期

主軸方位が北西～西北西、北東～北北東方向の建物群で構成され、北部緩斜面北側に集中してみられる。方形を呈する柱穴の1号建物が初期のもので、それを中心に展開していったものと想定さ

れる。また、ＳＢ－01の特殊性から拠点的集落を伺わせる。建物の重複から４小期に分けられる。時期は11～12世紀である。

中世Ⅰ期

主軸方位が西、北方向の建物群で構成され、南部緩斜面上と東部丘陵平坦面上に万遍なくみられる。建物の重複から４小期に分けられ、時期は12世紀末～13世紀である。

中世Ⅱ期

主軸方位が西北西、北北東方向の建物群で構成され、北部緩斜面上と南部緩斜面南側と東部丘陵平坦面南側にみられる。建物の重複から４小期に分けられる。時期は13～14世紀と想定される。

中世Ⅲ期

主軸方位が西～西南西、北～北北西方向の建物群で構成され、主に北部緩斜面上、東部丘陵平坦面上にみられる。建物の重複から３小期に分けられる。時期は15世紀以降と想定される。

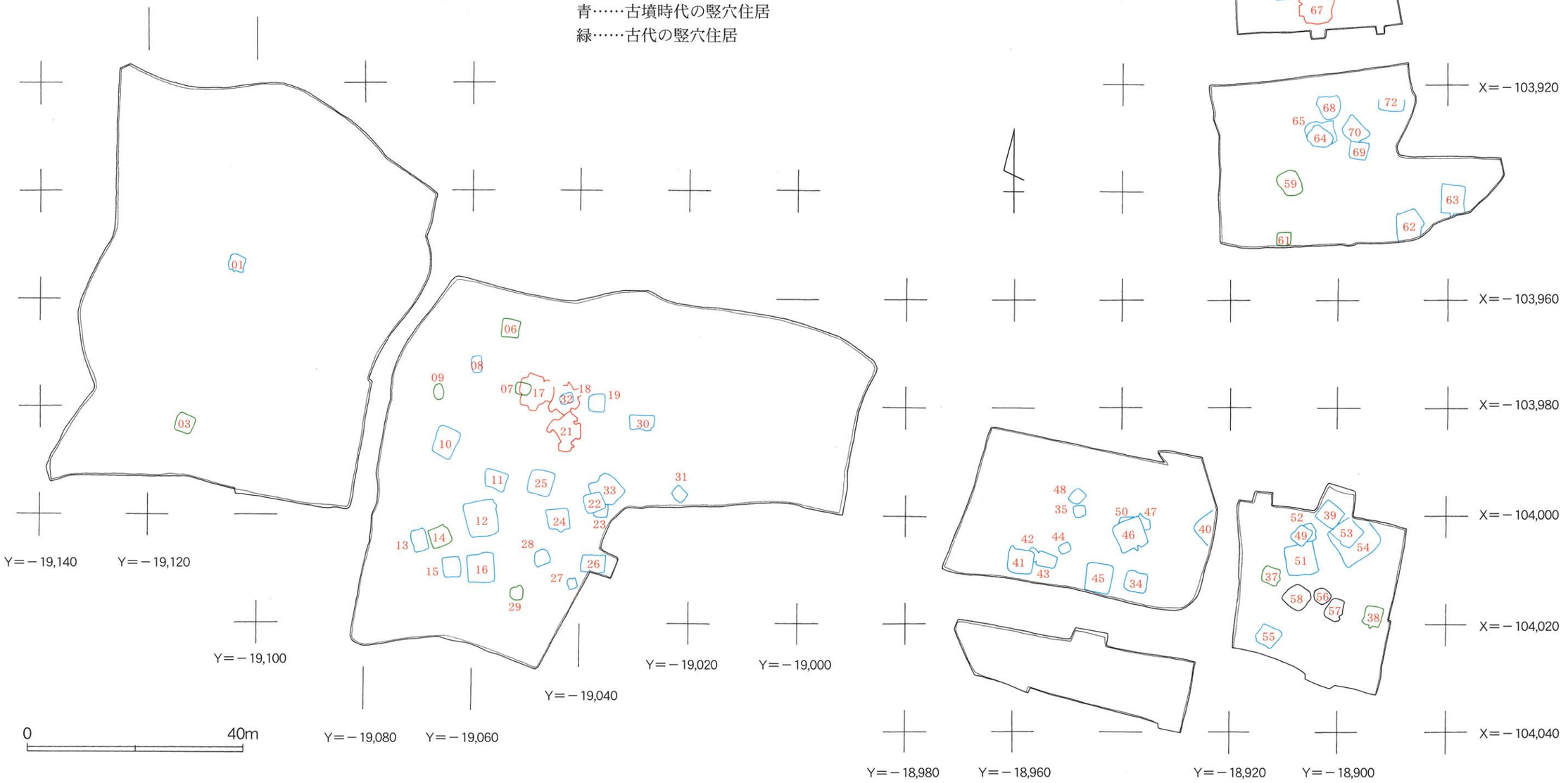
近世～近代

東部丘陵平坦面上に農道の側溝（16号溝）が、Ⅶ区の北部では、31・32号溝が掘削される。また、同区の東部から北東部にかけては畑が耕作され、その後埋められる。

東川北地区遺跡群は、部分的に断絶があるものの、縄文時代から現代まで綿々と営まれた集落であることが分かる。特に、９世紀後半から12世紀にかけて、拠点的集落として繁栄していたと思われる。また、遺跡群の南西には14世紀後半から15世紀前半に北原氏の居城で、郷の中心地的場所であったいう徳満城があり、手仕山遺跡にはその徳満城の出城的機能を有していた山城が構築されていることから、その影響を受けて集落が繁栄していたと思われる。その後、集落は東の谷からそれを越えた丘陵平坦面や南に移動しながら現在に至り、緩斜面と丘陵平坦面は耕作地として使用されることとなったと思われる。

凡例

黒……縄文時代後期～晩期の竪穴住居
赤……弥生時代後期の竪穴住居
青……古墳時代の竪穴住居
緑……古代の竪穴住居

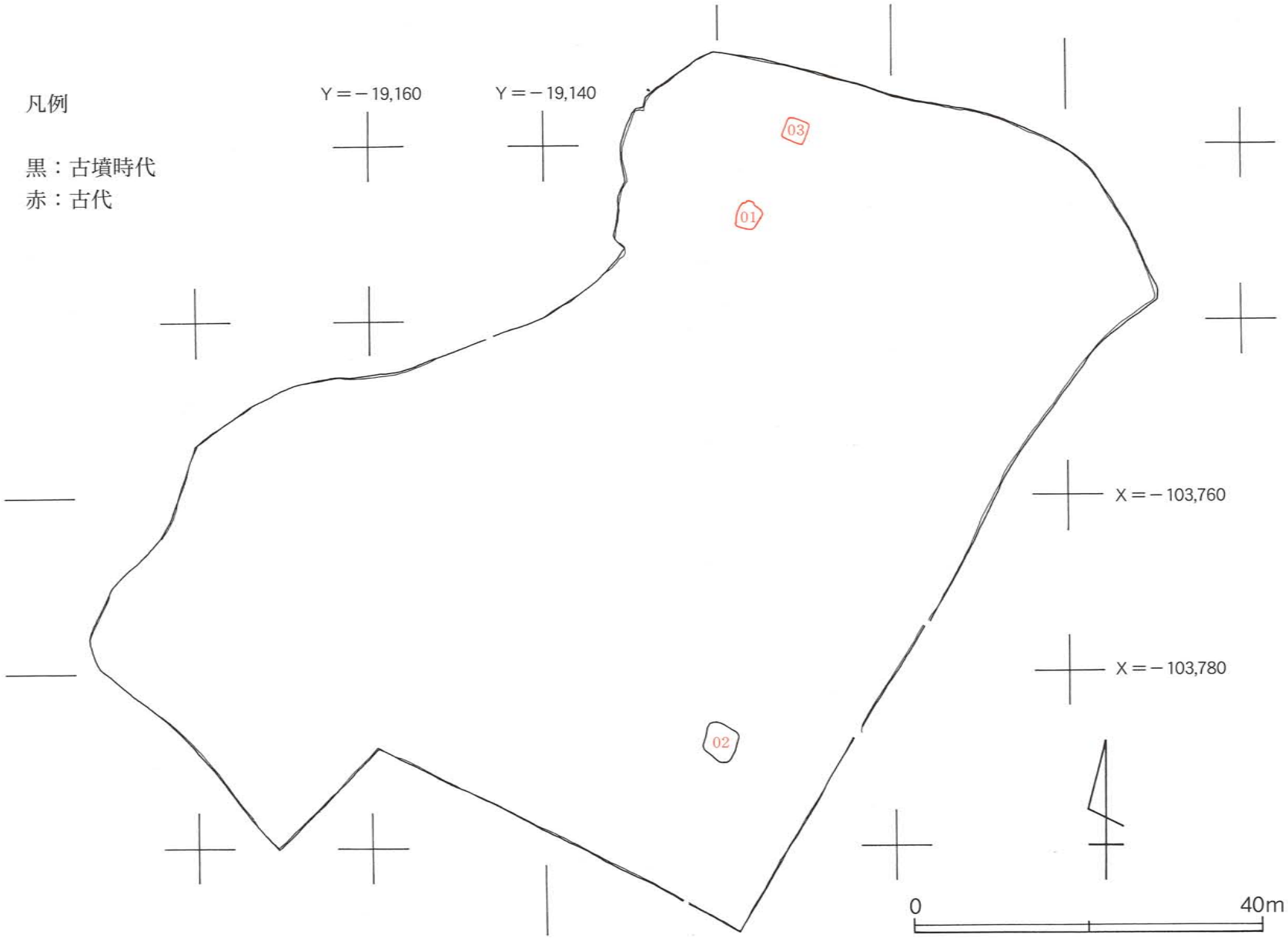


第46図　古屋敷遺跡　縄文～古代の住居

凡例

黒……古代Ⅰ期
赤……中世Ⅰ期
青……中世Ⅱ期
緑……中世Ⅲ期

第47図　古屋敷遺跡　古代～中世の建物



第48図　内牧遺跡　古墳～古代の住居

第49図　内牧遺跡　古代～中世の建物

第７章　彦山第５遺跡

第７章　彦山第５遺跡

第１節　はじめに

平成14年４月30日、耕地課および西諸県農林振興局との協議において、東川北地区圃場整備事業の追加工事に伴う遺跡の有無の照会があった。調査対象地区内においては、彦山第４・第５遺跡が周知されていたため、県文化課が試掘調査を実施した後、再協議することとなった。

平成14年12月10日～11日、調査対象地内の踏査と試掘調査が実施された。その結果、調査対象地域は彦山第５遺跡のみとし、旧地形は平坦面が殆ど無い狭長な痩せ尾根であること、西半分は数10cmの客土があり、調査対象となる土層も殆ど削失していることが判明した。

平成15年５月15日、４者による協議を開き、東側の畑地約2,000㎡について本調査を実施することに決定した。

第２節　遺跡の位置と歴史的環境（第１図）

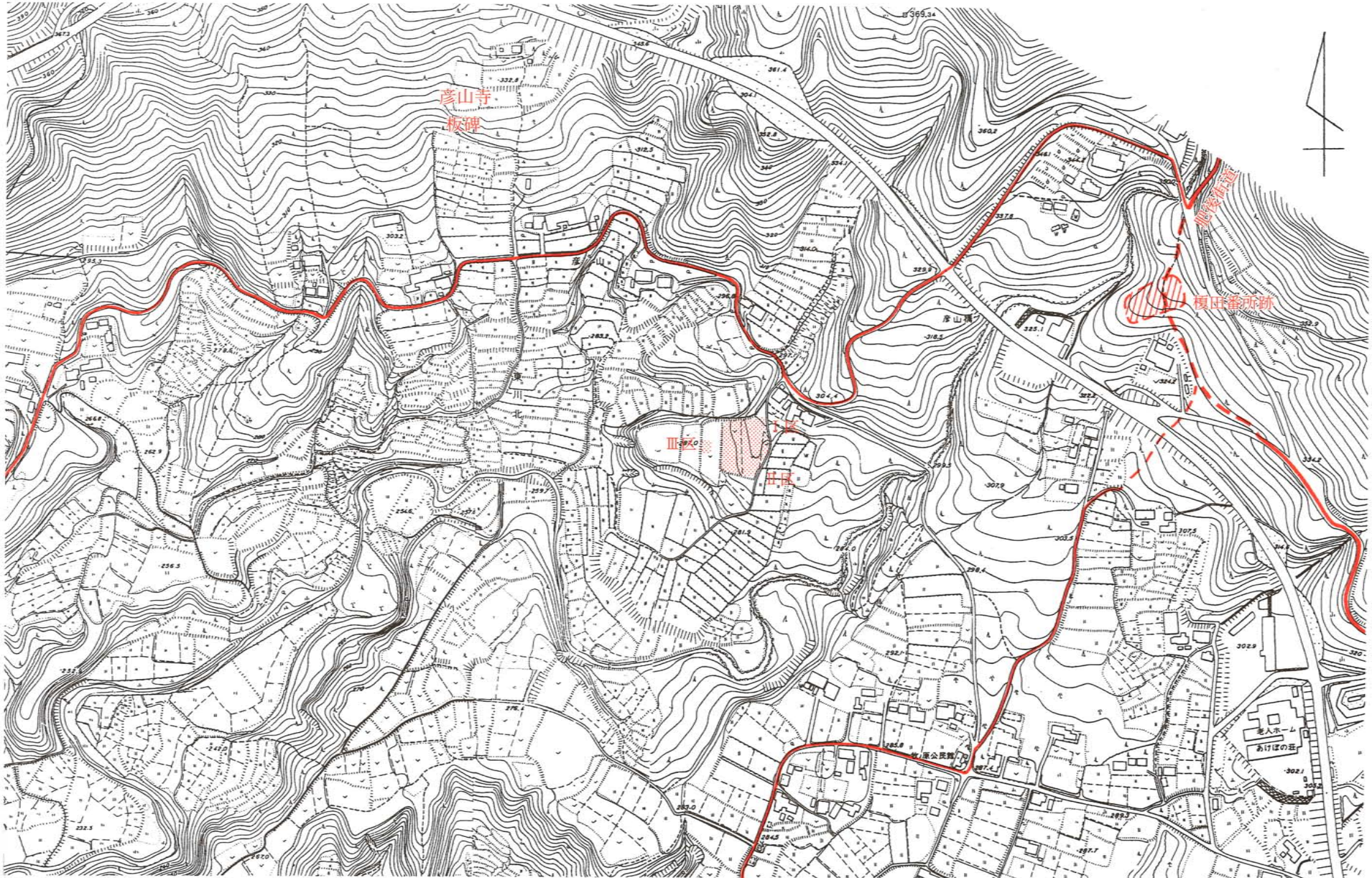
彦山第５遺跡は、えびの市大字東川北字彦山に位置し、前章の手仕山・古屋敷・内牧遺跡とは約１km東方、標高290～296mの斜面に立地し、氾濫原との比高は60～66mを測る。

調査地周辺には幾筋もの谷が入り込み、北山特有の地形を成す。遺跡の北側と南東側2.5～３kmには中世以降の古道があり、その中間には蛇行する急流「彦川」がある。２条の旧道は近世の肥後街道と合流し、番所が設置されている（榎田番所跡）。当番所は、出水（いづみ）、大口（おおくち）、去川（さるかわ）と供に薩摩藩４大番所のうちの１つであり、切石や平坦面等が現存する。

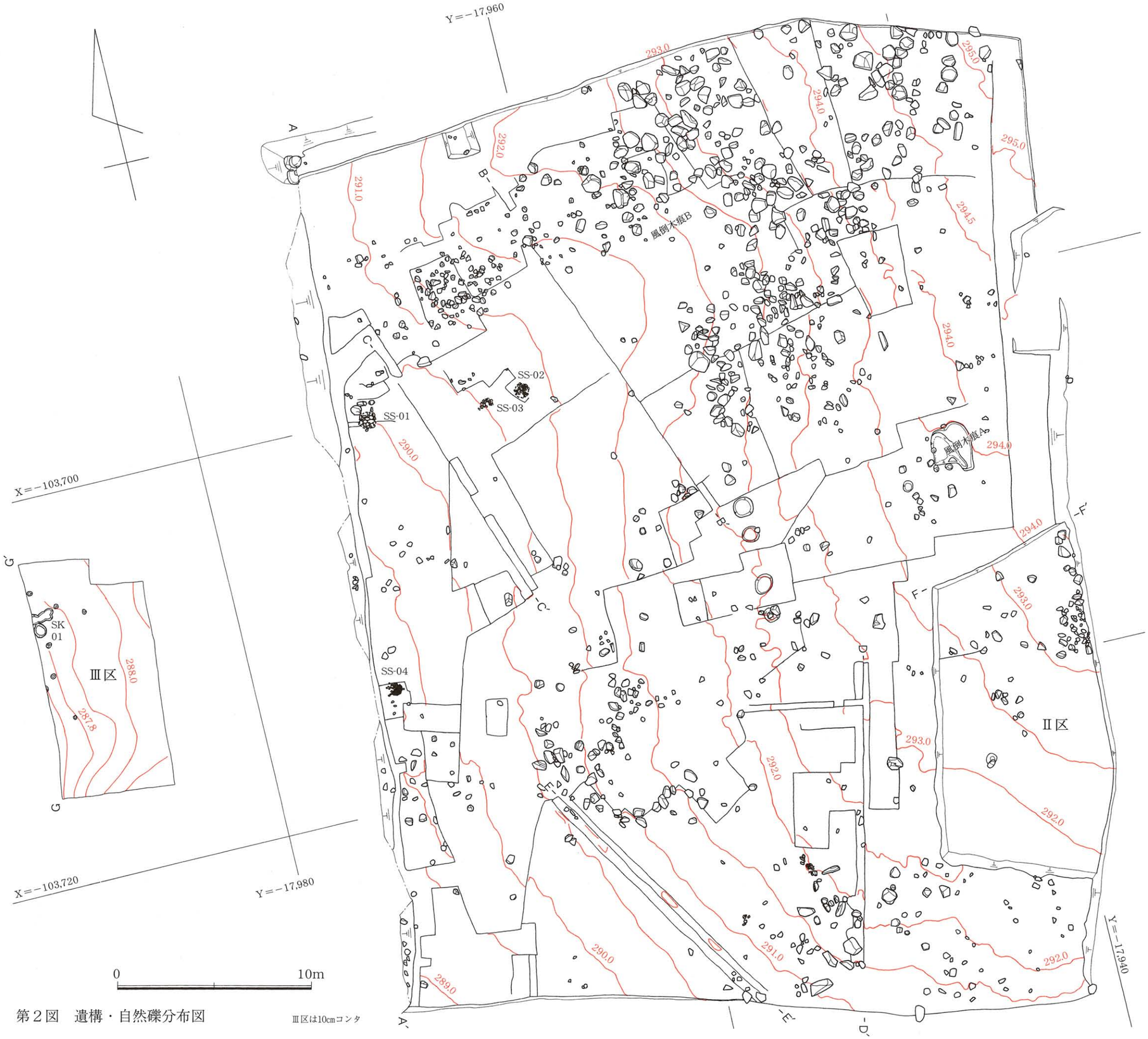
調査地の400m北西には、霧島山系の中腹にある白鳥神社の別当寺で白鳥山満足寺の隠居所であった彦山寺跡がある。廃仏毀釈や明治中頃の球摩街道開削工事によって荒廃していたが、昭和37年、町教育委員会によって復旧された。その際、歴代満足寺住職の墓石や五輪塔、法篋印塔・板碑・副碑が確認されている。墓石の殆どは加久藤溶結安山岩の板石で、天正15年（1587）のものや元和４年（1618）（３代目）・寛永17年（1640）（６代目）・承応２年（1653）（７代目）・享保13年（1728）・元文２年（1737）の銘がある。五輪塔は直径50cm内外の水輪や地輪が目立つが、殆ど原位置では無い。法篋印塔は２～３基あったようであるが、原位置では無い。正中２年（1325）建立の板碑は、高さ2.25m・幅0.45～0.53m・厚さ0.3mの角柱で、頂部を三角形に加工している。碑文は10行にわたり、175文字ある。副碑は高さ1.32m・幅0.27mの角柱で、宝光権律師が、恩師覚然師の33回忌供養のために建立した由の碑文69文字がある(1)。

註

(1)　えびの市役所『えびの市史　上巻』1994、同『えびの市史　石塔編』1998

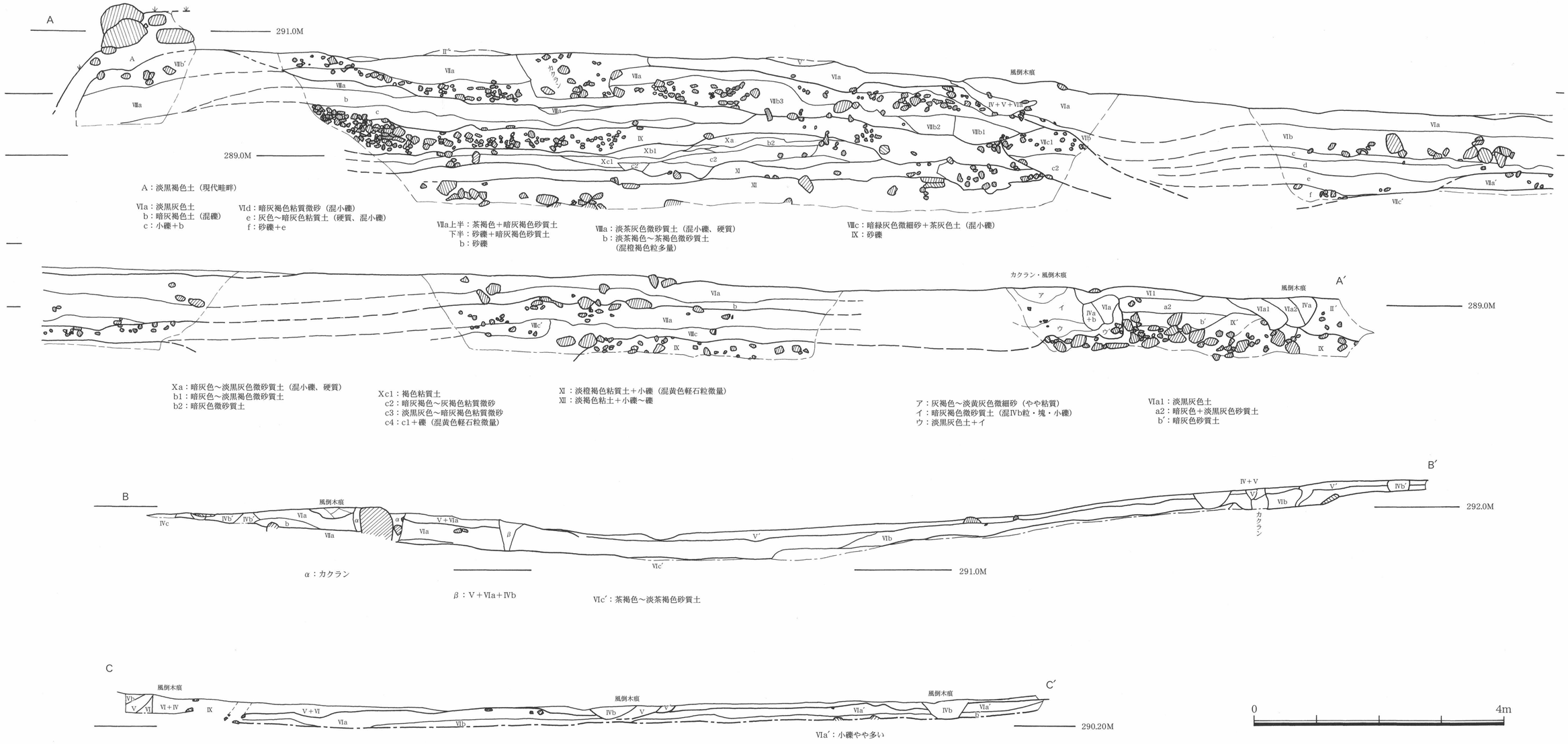


第１図　調査区および周辺の地形・古道（中世～近世）・番所跡ほか位置図（１：50,000）

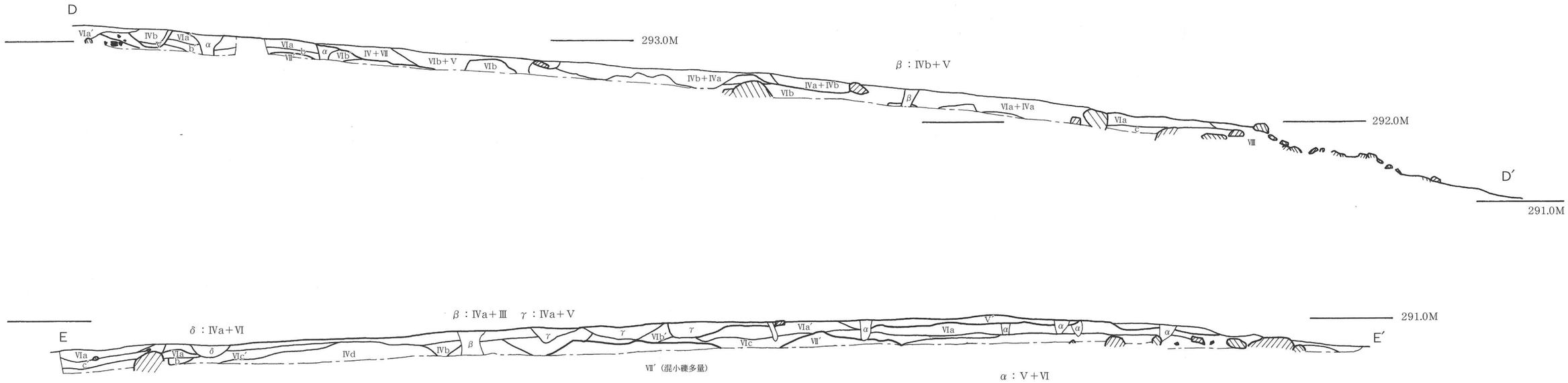


第２図　遺構・自然礫分布図

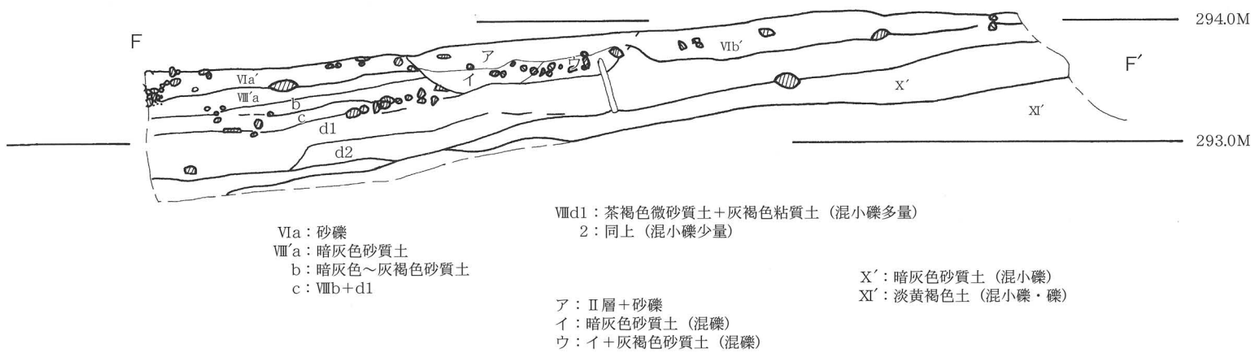
Ⅲ区は10㎝コンタ



第３図　調査区断面層序図（１）



Ⅱ区　北壁



Ⅵa：砂礫
Ⅶ′a：暗灰色砂質土
　b：暗灰色～灰褐色砂質土
　c：Ⅷb＋d1

Ⅷd1：茶褐色微砂質土＋灰褐色粘質土（混小礫多量）
　2：同上（混小礫少量）

ア：Ⅱ層＋砂礫
イ：暗灰色砂質土（混礫）
ウ：イ＋灰褐色砂質土（混礫）

X′：暗灰色砂質土（混小礫）
XI′：淡黄褐色土（混小礫・礫）

Ⅲ区　西壁

V′：砂質

α：カクラン
（暗灰褐色土＋Ⅳb・Ⅳa粒）

A：暗茶灰色砂質土（現代畦畔）
I：茶褐色土

β：Ⅳaと同じ

Ⅱ′：Ⅳb＋Ⅴ　1：SK-01（Ⅳaと同じ）

V′：茶褐色～暗茶褐色土
V″：暗茶褐色土＋Ⅵa
Ⅸ′：淡黄灰色硬質土＋暗茶褐色砂質土

第４図　調査区断面層序図（２）

第３節　基本的層序

層序は、Ｉ区の西壁を基本とし、上からＩ層：畑耕作土、Ⅱ層：旧耕作土・畑基盤土・客土（近現代、Ｉ層とほぼ同質）、Ⅲ層：茶褐色土（風倒木痕Ａでのみ確認）、Ⅳａ層：２次アカ（Ⅳｂ層の２次堆積層で、軟質、縄文前期の遺物を含む）、Ⅳｂ層：アカホヤ火山灰、Ⅴ層：茶褐色硬質火山灰（西側中央部で厚さ10cm程度、他は数cm～流失）、Ⅵ層：黒灰色～暗灰色土（縄文早期の文化層、ａ～ｆ層に細分、ａ層は殆ど火山灰、北東側では上部に礫（最大１ｍ位）が大量に混じる、ｂ層以下は加久藤溶結安山岩の風化砕細礫が混じり、ｅ～ｆ層には亜角礫が多い）、Ⅶ層：黄褐色～茶褐色土＋硬質の暗灰褐色砂質土（下半は小礫～礫が多く混入しｂ層とした）、Ⅷ層：淡茶灰色～茶褐色微細砂質土～暗緑灰色微細砂混じり（ａ～ｃ層に細分）、Ⅸ層：砂礫層、Ⅹ層：暗灰色～淡黒灰色～灰褐色微砂質土（旧表土で、a～c４層に細分）、Ⅺ層：淡橙褐色粘質土＋小礫、Ⅻ層：淡褐色粘質土＋礫に分別した。

調査区隣接地の古老の話によると、入植した50～60年前は原野で、50～60cmほど削って西方へ土を運んで平坦面に造成したことがわかり、通常見られるⅢ層（黒灰色土）が全く遺存していない原因が理解できた。なお、火山灰分析の結果では、Ⅷ～Ⅻ層はＡＴ降下以降の堆積という報告を得た（付篇）。

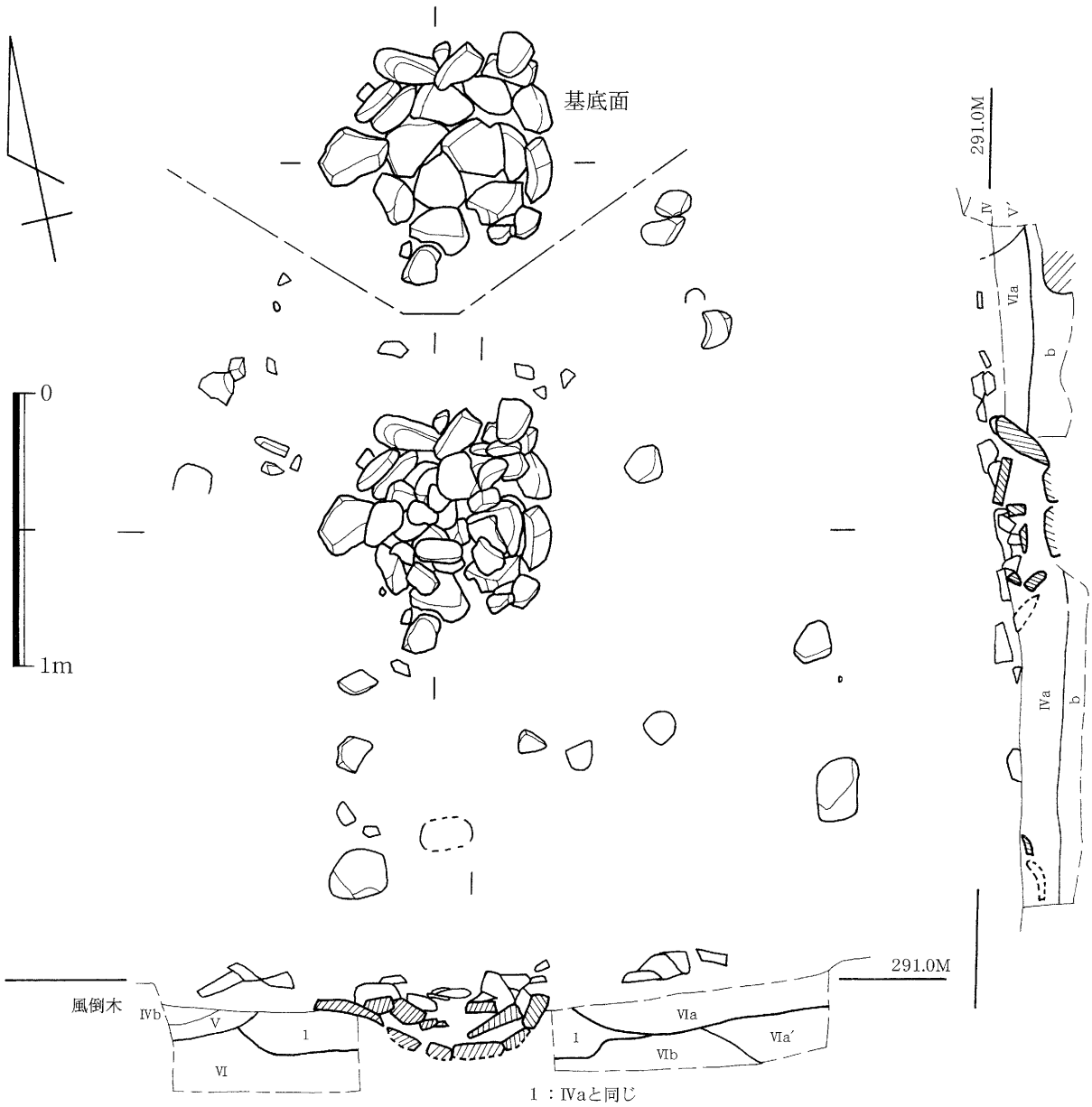
第４節　調査の方法と経過

調査対象地においては、アカホヤ火山灰以下の地層は良好に遺存していること、客土から縄文早期の土器片が出土していることから、同期の文化層を包蔵している可能性が高いことの２点を念頭に、表土剥ぎを開始した。畑耕作土は５～20cm、西～南側の斜面端縁においては40～50cmの厚さがある。弥生時代～中世前半の黒色土を主とする遺物包含層は、全く遺存していなかった。Ｉ層下部や客土（Ⅱ層）からは弥生～中世の土師器細片を採取したために若干の遺構を期待してⅣａ層～Ⅳｂ層上面で掘削を止めて遺構検出を実施したが、遺構は皆無であった。次にⅣ層と通常は無遺物層であるⅤ層を掘削し、Ⅵ層の上面（縄文早期）を検出していった（Ｉ区）。畦畔部は全て除去し、本来の地層を露出させ、基本的層序の把握をした。南東部はⅦ層まで削失しておりⅧ層の礫層が露出したことから、一部、Ⅹ層の淡黒灰色土の調査を目的として礫層を剥ぎ、Ⅱ区とした。Ｉ区の南の畑地もⅣ層以下が遺存していたが、急斜面であり、工事で削平されないことも確認したことから排土置き場にした。反面、Ｉ区の西隣の水田の西半部はⅥ層が遺存していることがわかり、遺物の出土が想定される区域をⅢ区とした。

第５節　遺構と遺物

１．遺構

縄文時代早期（Ⅵ層）の遺構は極めて少なく、Ｉ区では集石遺構４基のみ、Ⅲ区では土坑１基のみである。被熱礫は、東南部を除くほぼ全面に散布していたが、土器片や石器・剥片等と同様、流



第５図　ＳＳ－01　遺構実測図

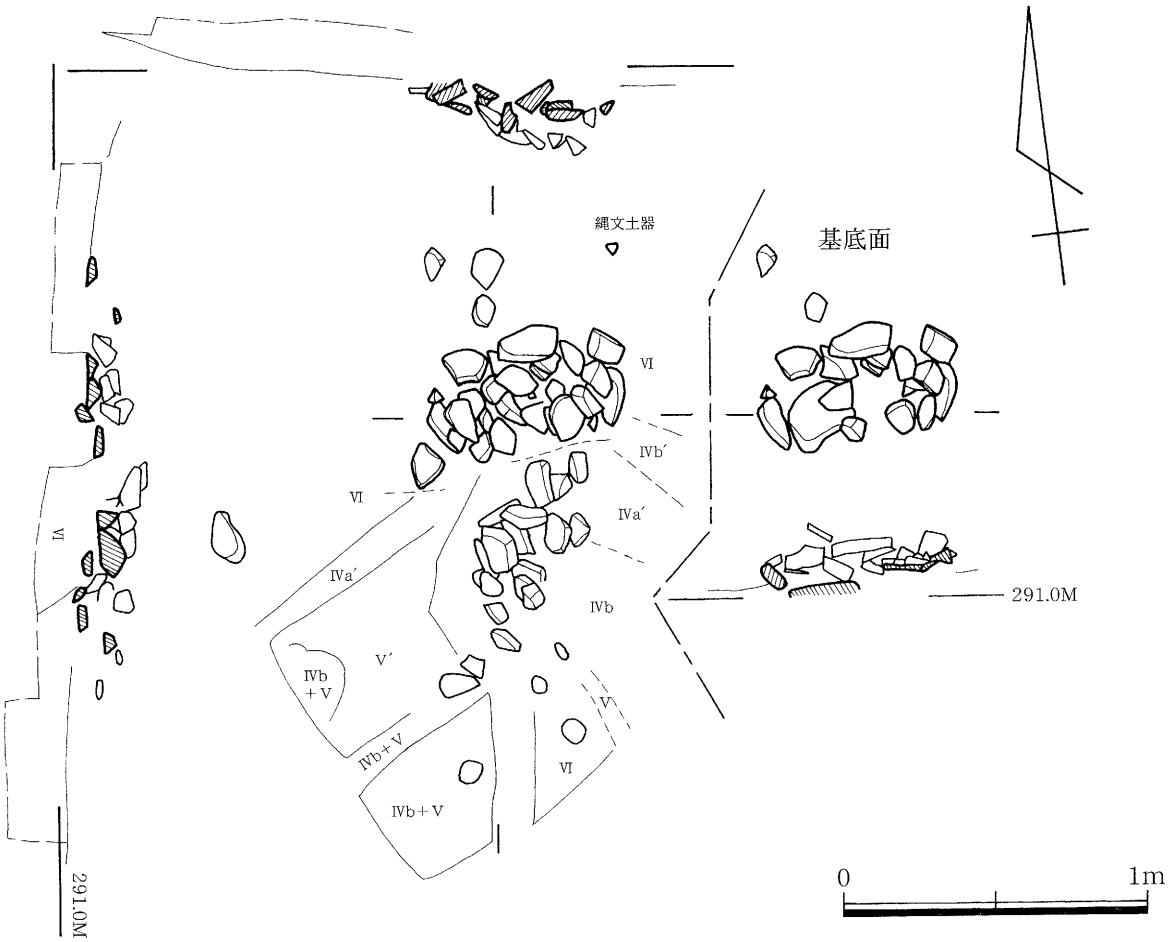
れ堆積（原位置でない）であると判断した。

集石遺構の構成礫と被熱礫は全て加久藤溶結安山岩であり、遺跡内で調達できる。自然礫は、桃褐色の溶結円礫を僅かに含むが、殆どは加久藤溶結安山岩で、被熱礫の数倍も検出している。

ＳＳ-01（第５図）

Ｉ区の北西部、谷が埋没し終える頃・Ⅵａ層内で構築された集石である。掘り込みは、土層断面観察土手でのみ確認できた。東側はさらに撹乱を受けていることも判明したが、平面プランの検出はできなかった。中央寄りの拳大の礫21個は赤橙色に被熱し、これらを除去すると掌大の礫を20～60度に傾けて外径70～80cm程度の円形に配置している。炭化物や残留有機物は、検出されていない。周辺には被熱した礫が散在するが、原位置ではないと思われる。

第６図　ＳＳ－02　遺構実測図



第７図　ＳＳ－03　遺構実測図

ＳＳ-02（第６図）

01号集石の８ｍ東、浅い谷の北肩寄りで検出した、直径80cm程に被熱礫が配置されたものである。掘り込みは認められず、西側は風倒木によって原位置が保たれていない。構成礫は１辺５～10cmの亜角礫が多く、炭化物等は検出されていない。

ＳＳ-03（第７図）

02号の西２ｍで検出した、直径70cm程に被熱礫を配置したものである。

南半分は、風倒木によって横転している。周縁にやや大きめの扁平礫が配置され、西側にのみ掌大の基底石が認められた。掘り込みは認められず、炭化物や穀物も未検出である。

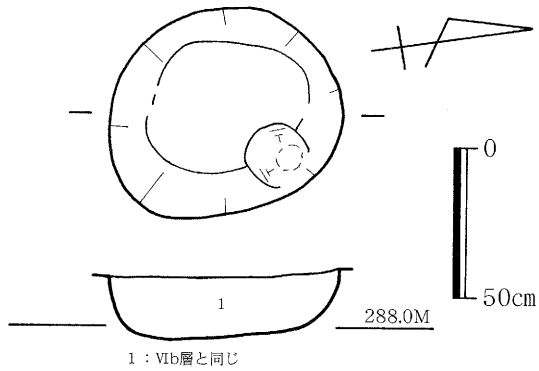
ＳＳ-04（第８図）

西側中央部において検出した、拳大の被熱礫60個余を直径60cmに配置したもので、一部、数個が放射状に延びている。掘り込みは無く、炭化物や有機物も未検出である。

ＳＫ-01（第９図）

Ⅲ区の北西部において、長径78cm・短径66cmの楕円形を呈する土坑を検出した。深さは、18～21cmを測る。覆土はⅥａ層であり、人為的掘り込みと判断したが、出土遺物は無い。また、壁面の土色変化等も認められず、機能は不明である。

第８図　ＳＳ－04　遺構実測図

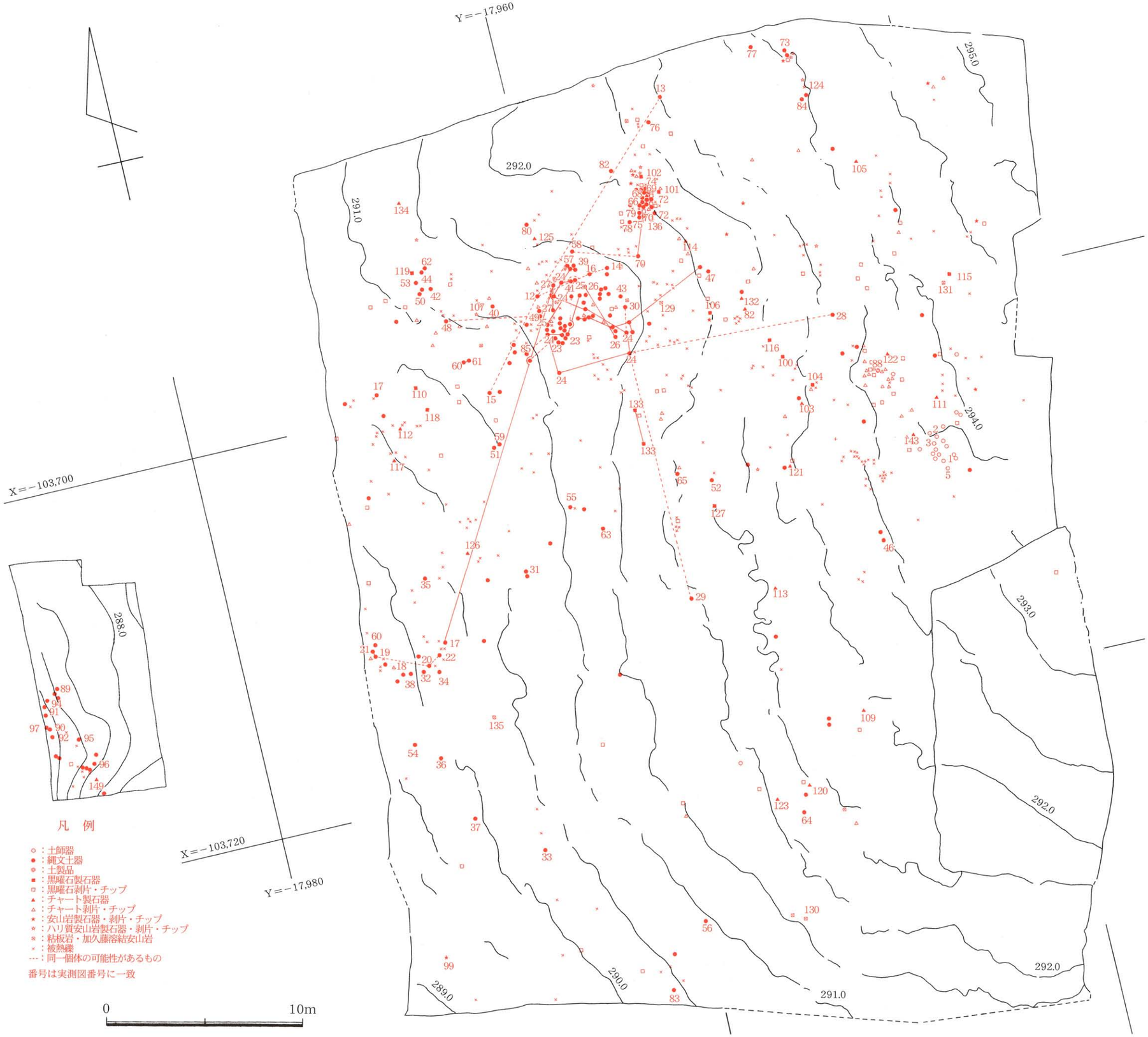


第９図　Ⅲ区　ＳＫ－01　遺構実測図

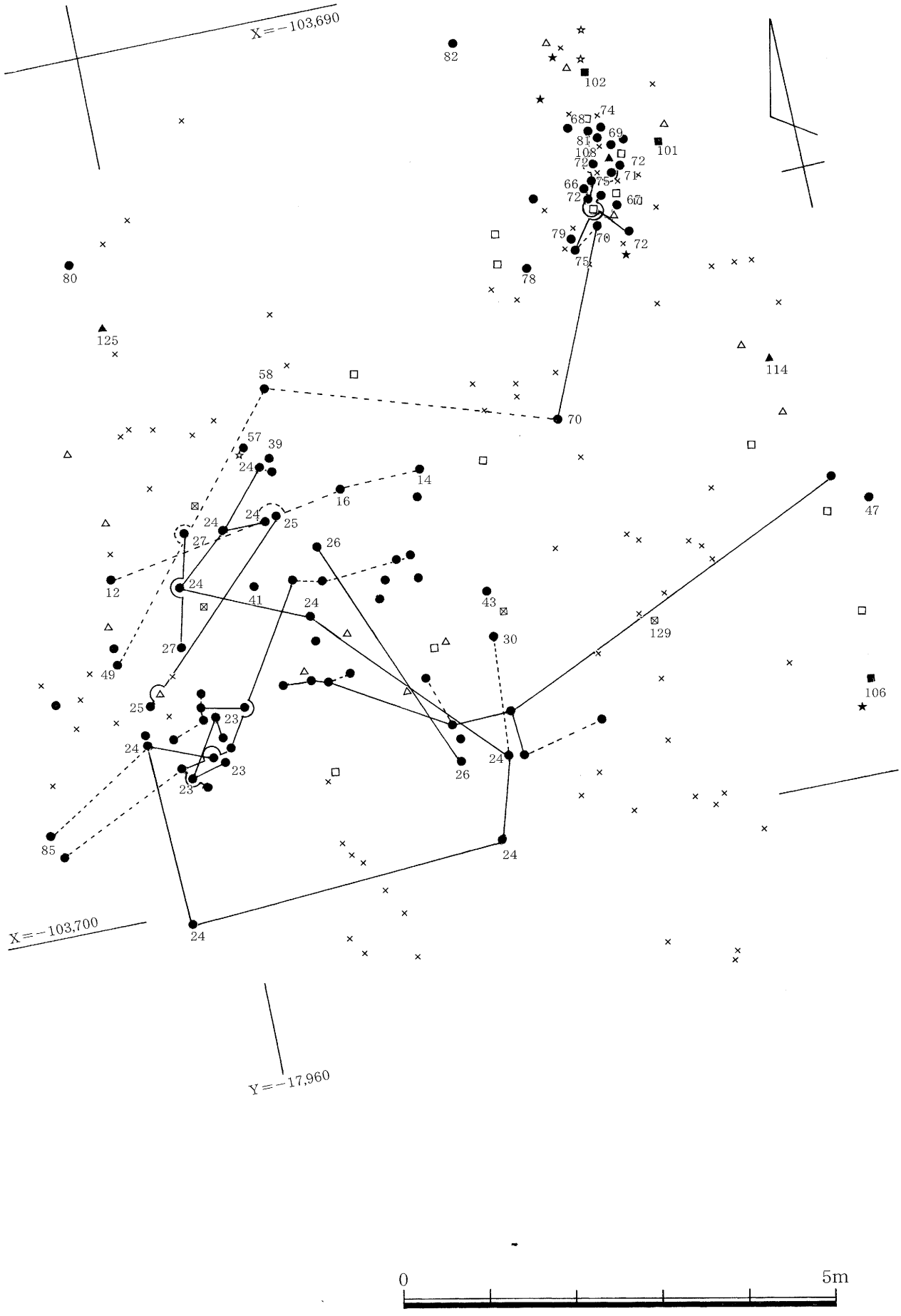
２．出土遺物

Ⅰ・Ⅱ層や現代の溝状遺構・撹乱からは、弥生時代終末～古墳時代前期の土器片や古代～中世の土器片の砕細片が若干のほか、中世の青磁や褐釉陶器が出土した（第12図）。当該期の何らかの遺構が存在したのであろうが、文化層は全て開墾によって消失している。

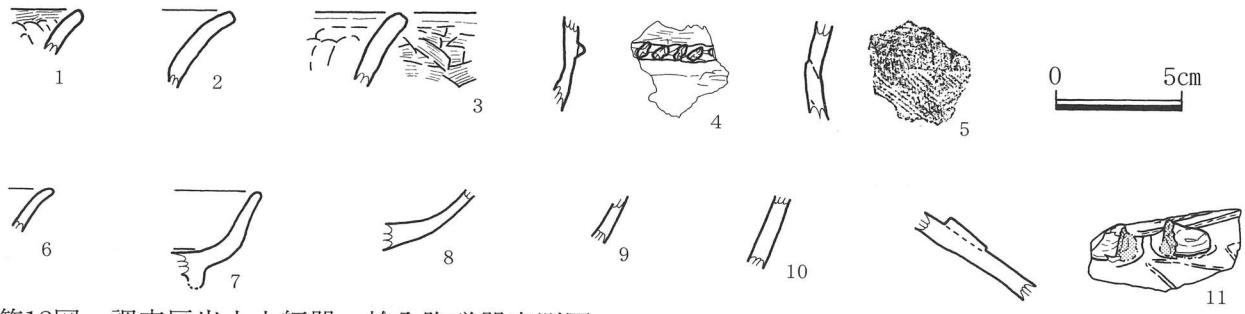
Ⅰ区のⅥ層上面においては、Ⅳｂ～Ⅶ層を主とする直径２～５ｍ程の風倒木痕が多く認められた。これら風倒木痕は殆ど無視したが、遺物が認められた２ヶ所（Ａ・Ｂ）については掘り下げて、遺物を取り上げた（第10・11図）。風倒木痕内のⅣａ層からは縄文時代前期の土器片（第16図-77・82・83）や石器（第21図-142）等が数ヶ所で検出されたが、出土量は僅かである。



第10図　出土遺物分布図



第11図　密集地点　遺物分布図　　記号は第10図と同じ



第12図　調査区出土土師器・輸入陶磁器実測図

表1　出土遺物観察表（1）　　土師器

No	出土地	器種	法量(mm)			調整		胎土	焼成	色調		備考
			口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第12図1	I区 風倒木痕A	甕	−	−	−	ハケ	ハケ〜工具ナデ	茶褐色粒微量	ややあまい	淡橙	淡橙〜淡黄褐	
2	I区 II層	甕	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	赤褐色粒・微砂少量	ややあまい	淡橙	橙褐	外面:ススス少量
3	I区 風倒木痕A	甕	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	茶褐色粒少量	良	淡黄褐	淡黄〜淡桃褐	
4	I区 風倒木痕A	甕	−	−	−	工具ナデ	粗工具ナデ	赤褐色粒やや多い	良	淡黄褐	灰褐	
5	I区 風倒木痕A	甕	−	−	−	ハケ	工具ナデ	赤褐色粒微量	ややあまい	淡黄	淡黄〜淡黄褐	外面:ススス少量

表2　出土遺物観察表（2）　　輸入陶磁器

No	出土地	種類	器種	法量(mm)			調整・紋様	露胎	胎土色	釉調		産地	年代・備考
				口径	底径	器高				外面	内面		
第12図6	I区 II層	青磁	碗	−	−	−	−	−	淡灰	淡オリーブ	淡オリーブ	龍泉窯	14c後〜15c中
7	I区 I層	青磁	皿	−	−	−	−	高台	淡灰	淡オリーブ	淡オリーブ	龍泉窯	14c後〜15c中
8	I区 II層	青磁	碗	−	−	−	−	−	淡灰	オリーブ灰	オリーブ灰	龍泉窯	14c後〜15c中
9	I区 II層	黒褐釉陶器	壷	−	−	−	−	−	青灰	黒褐	黒褐	中国	被熱,明代10と同一個体か
10	I区 撹乱	黒褐釉陶器	壷	−	−	−	−	−	青灰	黒褐	黒褐	中国	明代9と同一個体か
11	I区 II層	褐釉陶器	耳付壷	−	−	−	−	−	褐灰〜灰褐	暗茶褐	暗茶褐	中国	明代

風倒木痕AはIII層混じりのVII・VIII層混土層であり、弥生時代終末〜古墳時代前期の土器片が92点出土したが、全く接合しない。地層横転以前は、当該期の土坑であった可能性が高い。

風倒木痕BのIVa・V・VII層混じりの層（V'層）からは、条痕文土器（轟I式）（第15図-66〜第16図-72〜76）やチャートの剥片等が出土した。土器片の殆どは同一個体と思われる。

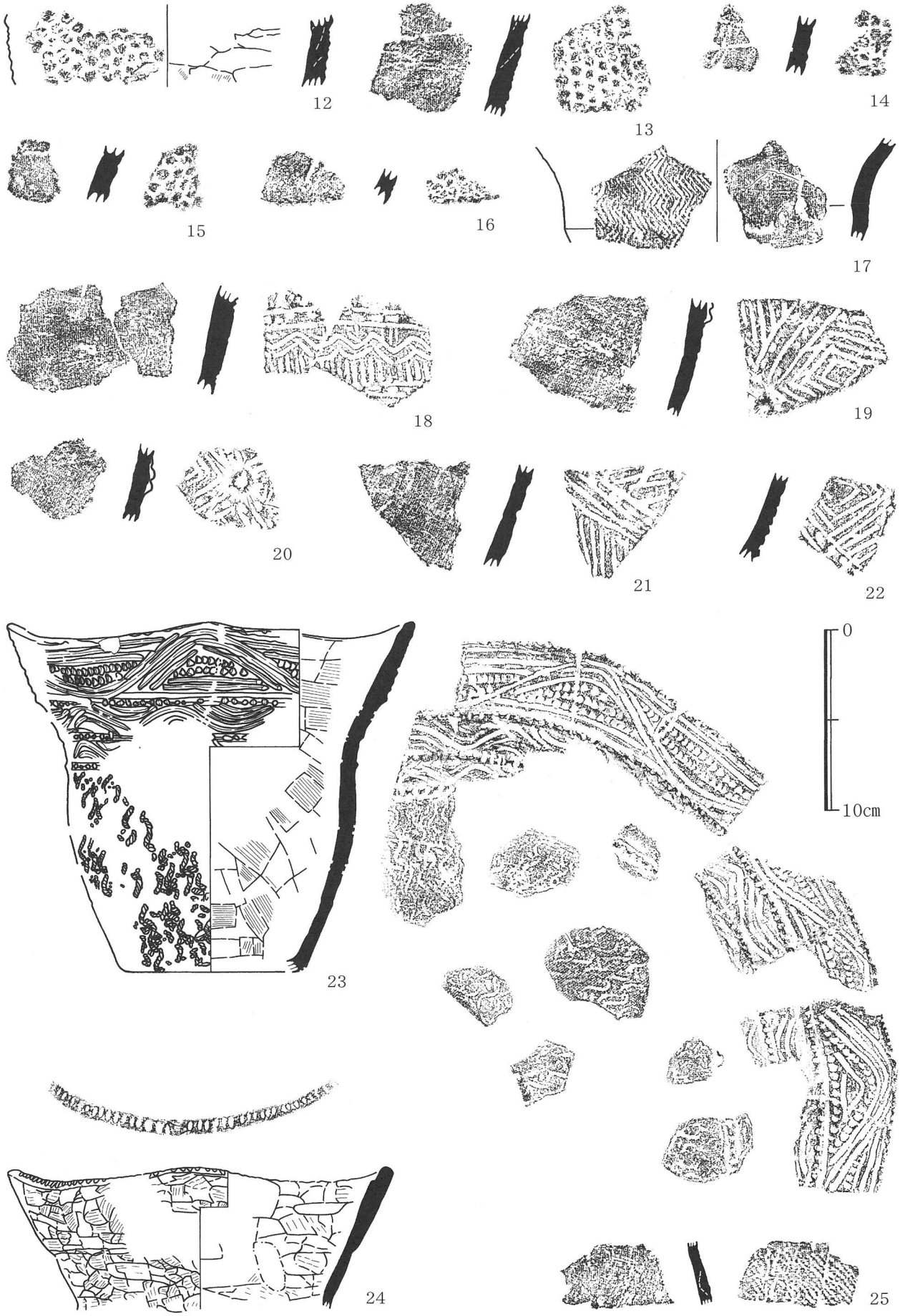
調査の主体であるVI層は、北東頂部から南西方向に浅く凹む谷部に厚く堆積し、III区にそのつづきが遺存する。遺物は、礫や小礫を殆ど含まないVIa層に多く含み、中でも北西部に集中し、接合する破片も多い。土器片は、I区で150点余、III区で16点出土したが、III区の遺物は接合しない。石器や剥片等はI区で140点余、II区で黒曜石のチップが1点、III区で3点出土し、製品は少ない。

縄文土器の大半は早期に属し、楕円形押型文土器（第13図-12〜16）のほか、手向山式土器（17）、刺突のある隆起突帯と瘤状突起を貼付し、沈線文を施すもの（19〜22）、平栫式土器（23〜第14図-30、32・33、35〜38）、塞ノ神式土器A類（31）、同B類（34、41）、円筒土器（40）等がある。

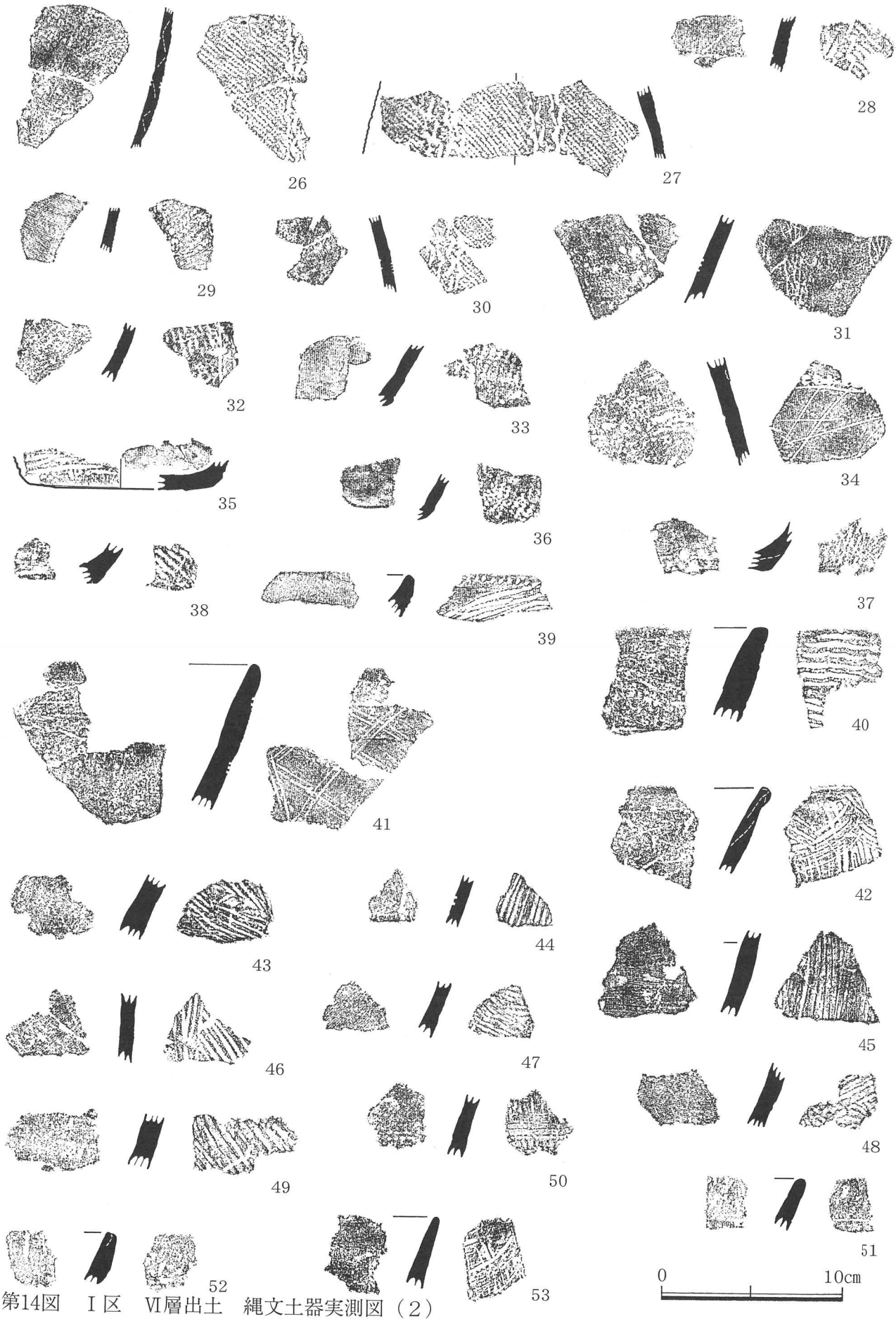
12〜16は全て別個体と思われ、19〜22は同一個体と思われる。23は、約30点の破片を接合・復元している。24の口縁部は、26〜30・32・33・35〜39等と同一個体と思われるが、接合には至らない。27は19m離れた破片が接合しており、当該土器が最も広範囲に分散している。

88は唯一の土製品で、土器片を円形に整形し、側面の一部を擦っている。同様の製品は、本市においては後期に盛行するが、早期のものとしては初見となる。

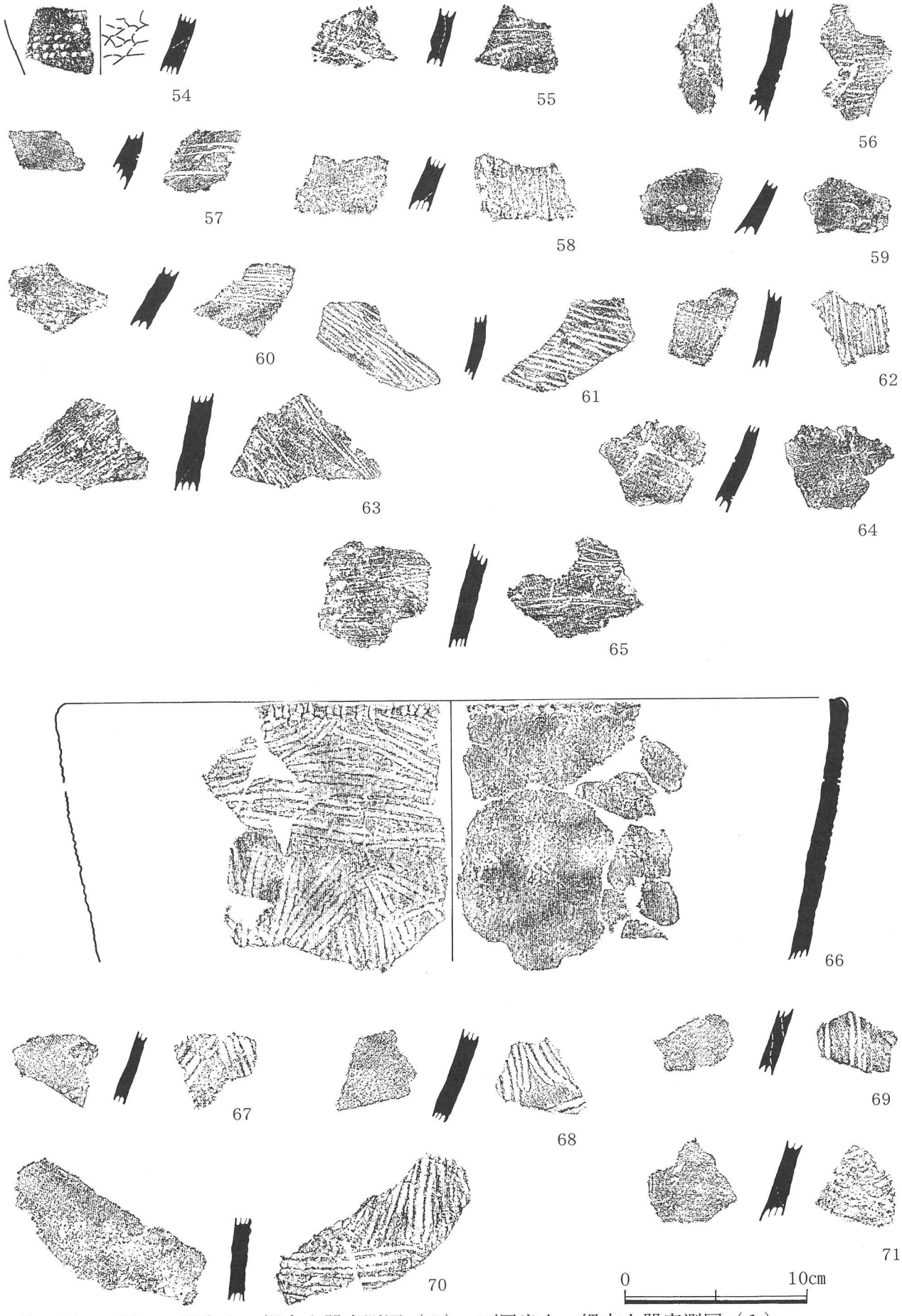
III区のVI層はI区から続いていた浅い谷状の落ち込みが若干遺存しており、塞ノ神式土器片10点



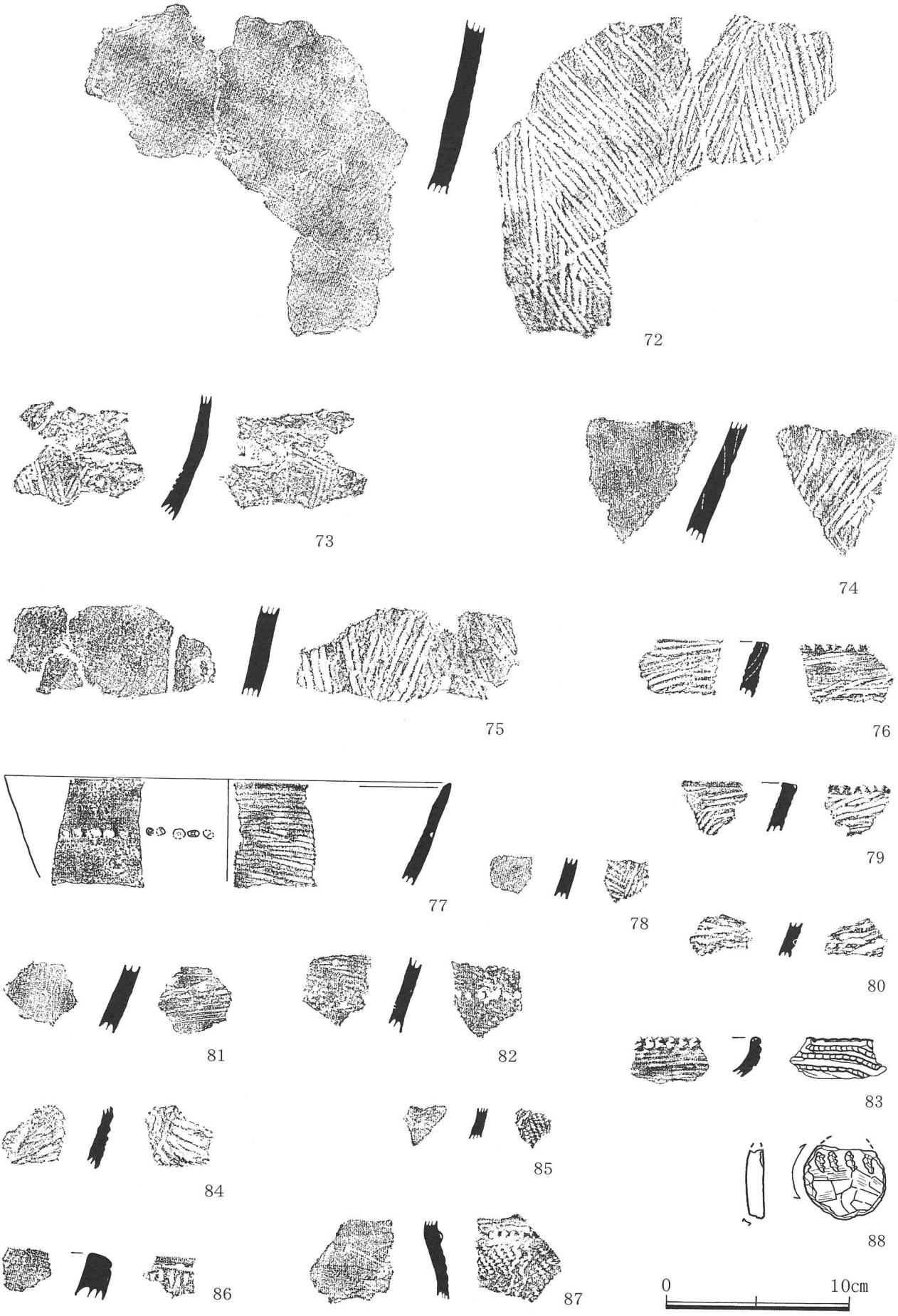
第13図　Ⅰ区　Ⅵ層出土　縄文土器実測図（1）



第14図　Ⅰ区　Ⅵ層出土　縄文土器実測図（2）

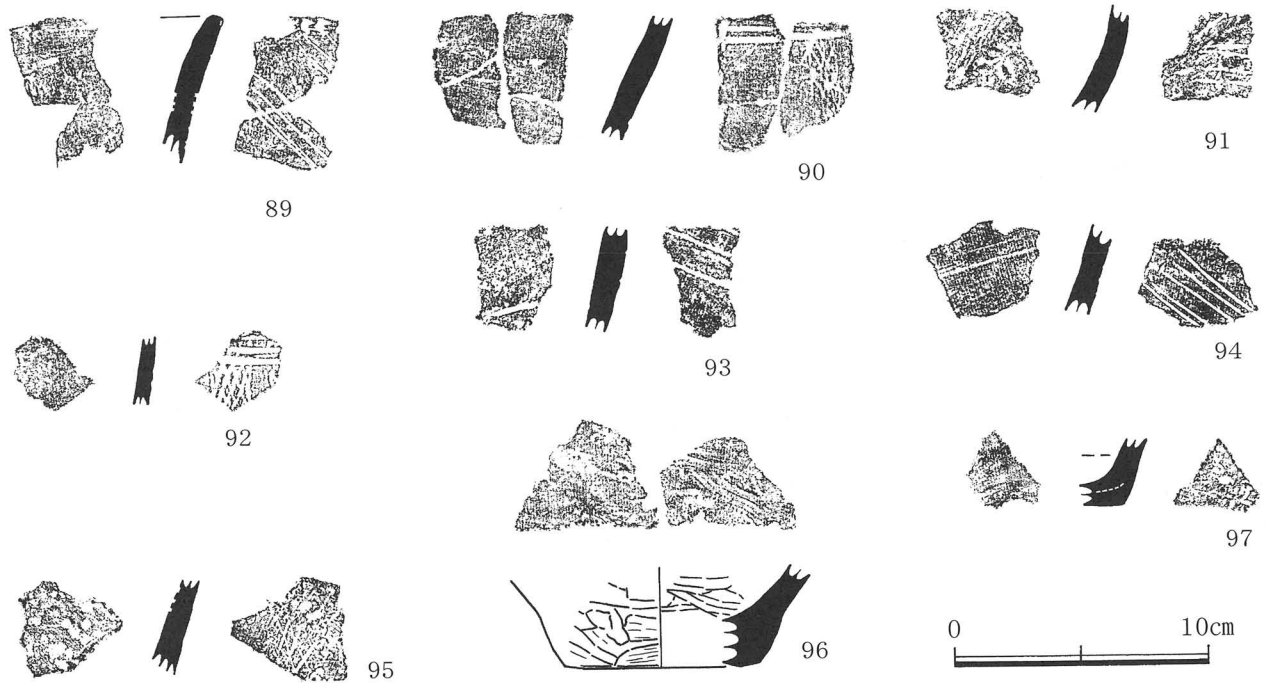


第15図　Ⅰ区　Ⅵ層出土　縄文土器実測図（3）、V'層出土　縄文土器実測図（1）　54～65：Ⅵ層



第16図　Ⅰ区　Ⅴ'層出土　縄文土器実測図(2)、Ⅳａ層出土・排土採取縄文土器実測図、土製品実測図

77～85：Ⅳa層



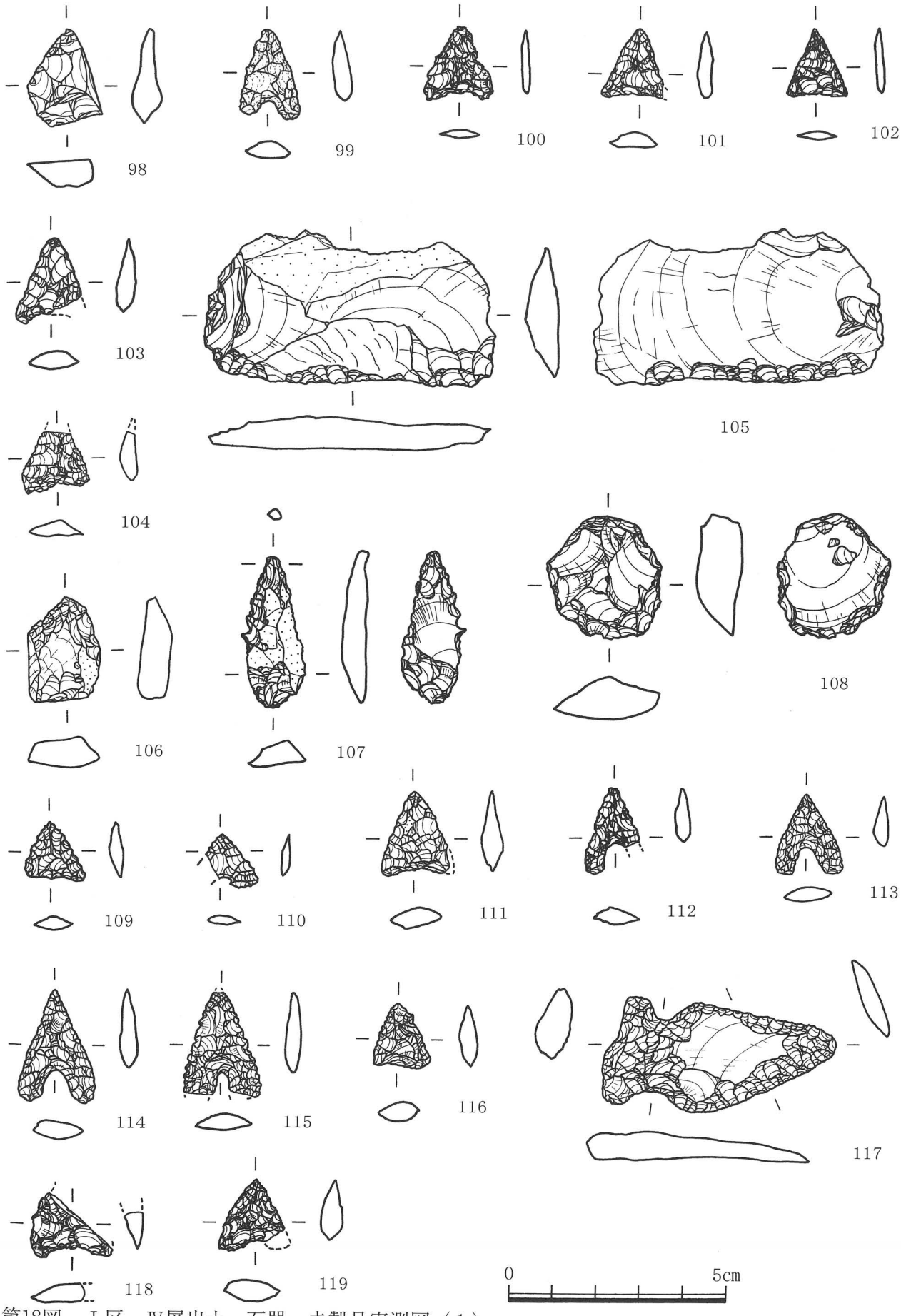
第17図　Ⅲ区出土　縄文土器実測図

余が出土した。接合した破片は無い。

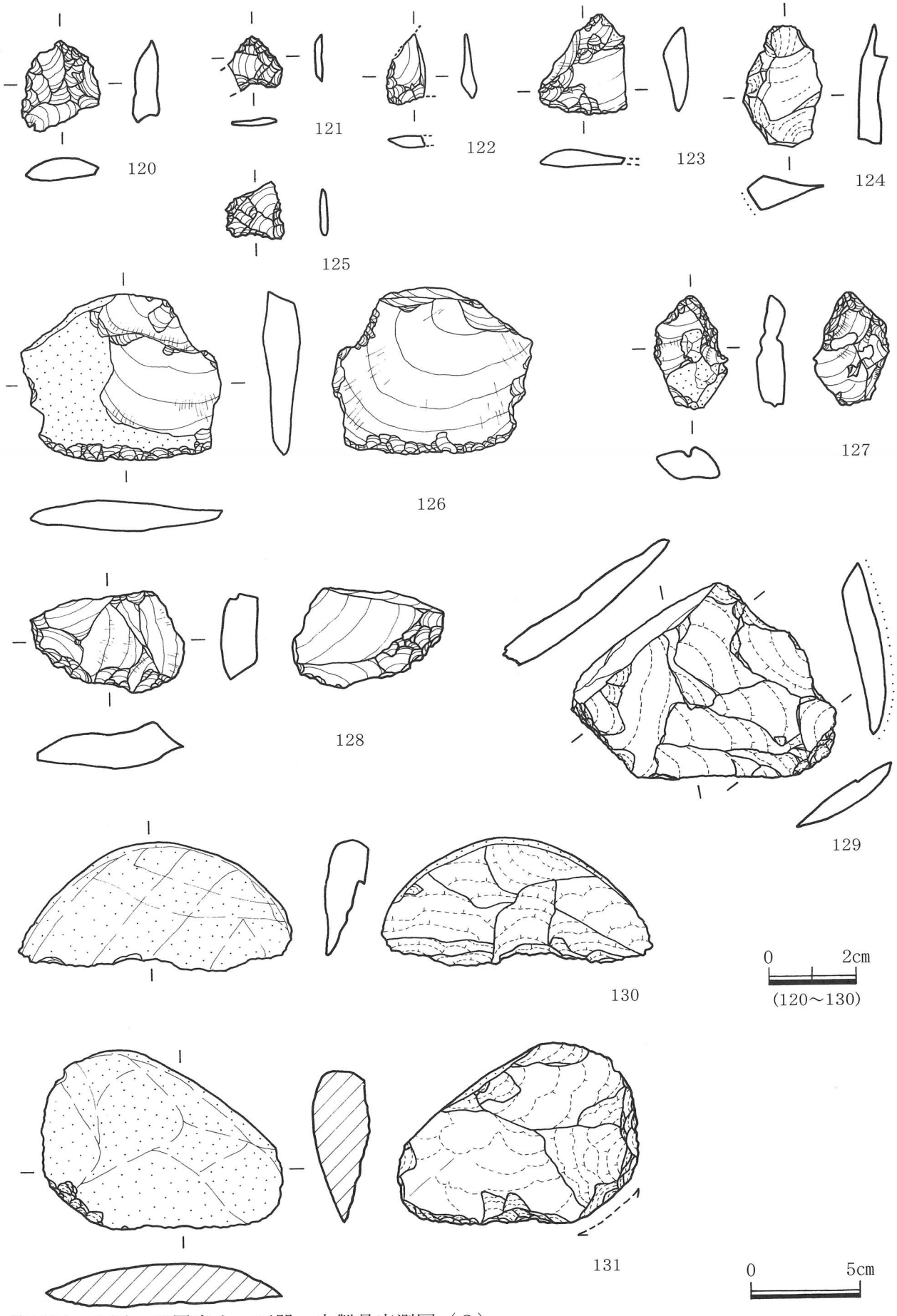
石器は、Ⅳａ層から打製石鏃１点（第18図-99）と未製品１点（98）、ほか剥片・チップ少量が出土している。Ⅴ・Ⅴ'層からは、打製石鏃が５点と未製品２点、スクレイパー１点のほか、剥片・チップが40点余出土している。Ⅵ層においては、打製石鏃が９点と未製品８点のほか、石匙１点、スクレイパー１点、刃器２点、２次加工のある剥片１点、台石の可能性のあるもの１点、石核数点のほか、剥片・チップが100点余出土している。133の石核は、２ｍ離れた２点が接合したもので、廃棄後に破損したものと思われ、一部、欠損している。135の平石の片面（検出面）には、細かい擦痕や平滑面があり、堅果類の粉砕や石斧刃部の粗砥的使用を想定したい。

打製石鏃の殆どは、３～４種類（産地）の黒曜石とチャート（白色・玉髄系のもの、黄緑色～暗青灰色系のもの）が利用され、刃器には粘板岩を、大型刃器と石皿は加久藤溶結安山岩を素材とする。

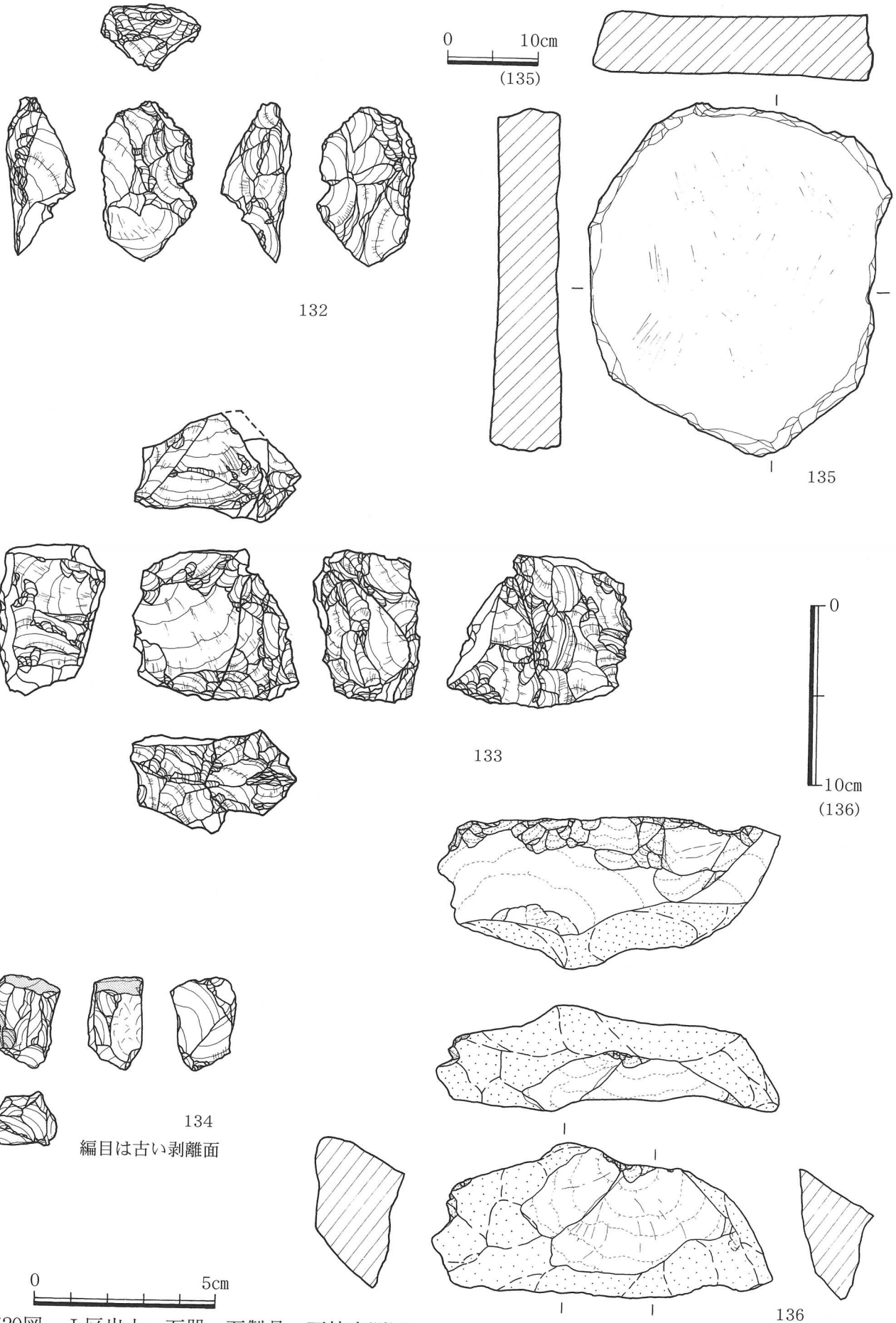
遺跡内においては、加久藤溶結安山岩のみ調達できるが、他の石材は全て持ち込みである。



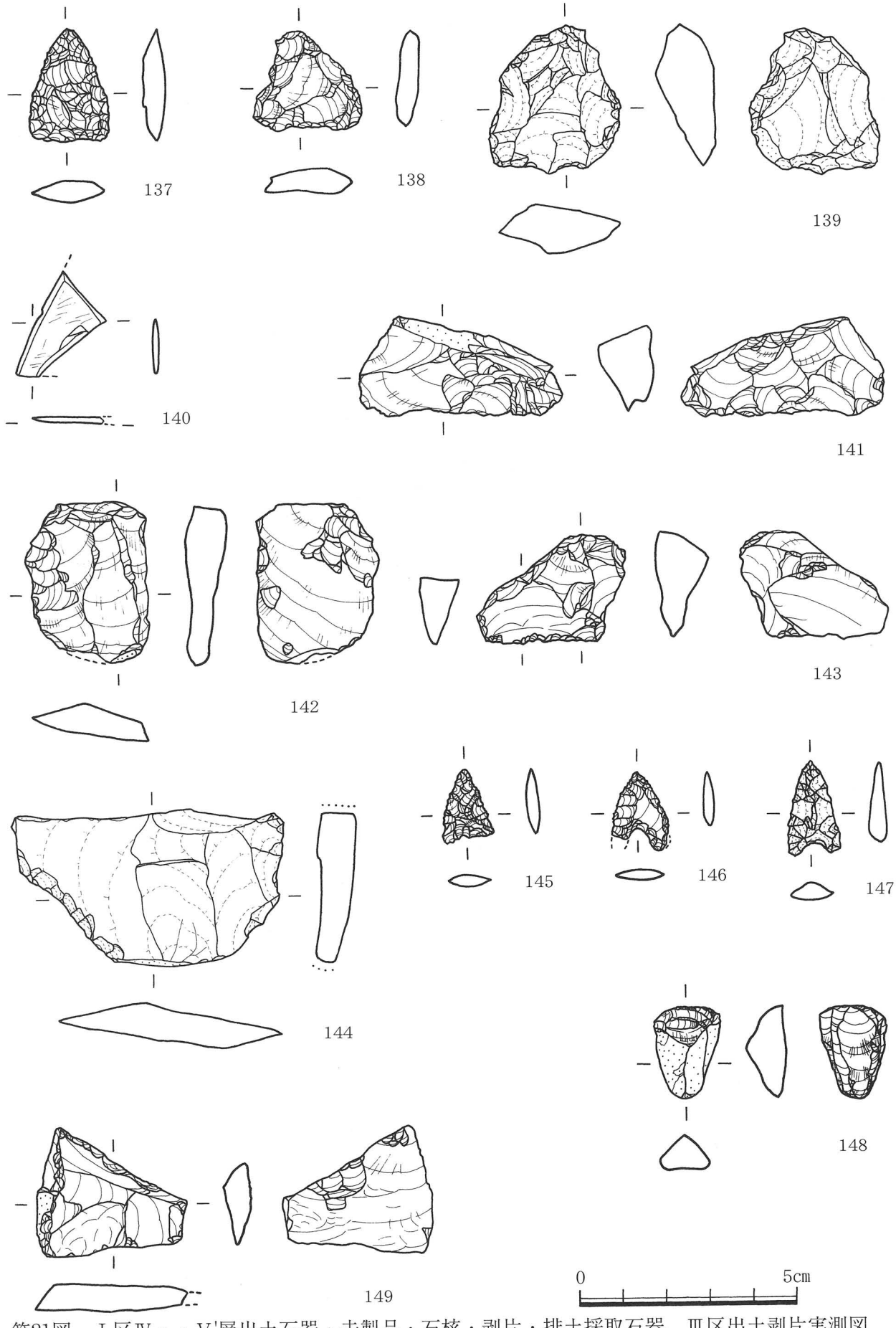
第18図　Ⅰ区　Ⅳ層出土　石器・未製品実測図（1）



第19図　Ⅰ区　Ⅳ層出土　石器・未製品実測図（2）



第20図　Ⅰ区出土　石器・石製品・石核実測図



第21図　Ⅰ区Ⅳａ・Ⅴ'層出土石器・未製品・石核・剥片・排土採取石器、Ⅲ区出土剥片実測図

表3　出土遺物観察表（3）　　縄文土器（1）

No	出土地	器種	法量(mm)			調整		胎土	焼成	色調		備考
			口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第13図 12	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	丁寧工具ナデ	微細砂やや多い	良好	褐～淡茶褐	淡橙茶	楕円形押型文
13	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	工具ナデ	粗細砂やや多い 小礫少量	良好	淡橙	暗灰～淡黄	楕円形押型文
14	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	丁寧工具ナデ	粗細砂やや多い	良	黄褐	灰褐～暗灰褐	楕円形押型文
15	I区 VI層 SS-01周辺	深鉢	–	–	–	ナデ	丁寧工具ナデ	微細砂やや多い	良	淡橙褐	淡黄～橙褐	楕円形押型文
16	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	丁寧工具ナデ	粗細砂やや多い	良	淡黄褐	黄灰	楕円形押型文
17	I区 VI層	深鉢	–	–	–	山型文	工具ナデ	粗細砂・小礫少量	良	淡灰褐～淡褐	淡黄灰～暗灰褐	手向山式 面：ススク少量
18	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	ナデ	微細砂少量	良好	淡褐～茶灰	褐～茶灰	手向山Ⅲ式系 外面：ススク少量
19	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	半ケズリ	粗細砂やや多い	良	淡橙黄～茶灰	淡黒灰～黄灰	外面：ススク少量
20	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	ナデ	粗細砂少量 茶褐色粒やや多い	良	淡黄～淡橙	淡黄～淡灰褐	
21	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	工具ナデ	微細砂少量	良好	灰褐～淡橙褐	暗灰褐～暗茶褐	外面：ススク微量 内面：オコゲ微量
22	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	ナデ	微細砂少量	良好	淡橙褐	暗茶灰	内面：オコゲ微量
23	I区 VI層	深鉢	223	105	194	工具ナデ	強い工具ナデ	粗細砂やや多い	良	暗茶灰～茶橙	灰褐～淡橙褐	
24	I区 VI層	深鉢	211	–	–	工具ナデ	工具ナデ	微細砂少量	良	茶灰～淡茶褐	淡橙褐～淡黄～暗灰褐	塞ノ神 外面：ススク微量
25	I区 VI層	深鉢	–	–	–	網目撚糸文・縄文	工具ナデ～ナデ	微細砂少量	良	暗灰褐～淡黄灰	灰褐～暗褐	塞ノ神 外面：ススク少量
第14図 26	I区 VI層	深鉢	–	–	–	網目撚糸文・縄文	工具ナデ～ナデ	微細砂少量	良	茶褐～褐	暗茶褐～淡黒灰	塞ノ神
27	I区 VI層	深鉢	–	–	–	網目撚糸文・縄文	工具ナデ・ナデ	微細砂少量	良	淡灰褐～淡褐	淡橙褐～褐	塞ノ神
28	I区 VI層	深鉢	–	–	–	縄文	丁寧ナデ	微細砂やや多い	良	淡橙褐～灰褐	黒褐	塞ノ神 外面：ススク少量
29	I区 VI層	深鉢	–	–	–	撚糸文	ナデ・工具ナデ	微砂少量	良	淡橙褐～淡褐	黒褐～暗灰褐	塞ノ神
30	I区 VI層	深鉢	–	–	–	網目撚糸文・縄文	ナデ	微細砂やや多い	良	茶灰～淡褐	暗灰褐～暗茶褐	塞ノ神
31	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	工具ナデ・ナデ	微砂やや多い	ややあまい	淡橙黄～淡黄褐	茶褐～淡黄褐	
32	I区 VI層	深鉢	–	–	–	粗条痕	粗工具ナデ	微砂微量	良	橙褐～淡黄褐	淡黄褐	
33	I区 VI層	深鉢	–	–	–	縄文	ナデ	微砂少量	良	淡黄	淡茶灰～淡灰	塞ノ神 36と同一か
34	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	粗工具ナデ	微砂やや多い	良	淡橙褐～淡茶褐	暗灰褐～淡茶灰	
35	I区 VI層	深鉢	–	103	–	ナデ	ナデ・工具ナデ	粗細砂・小礫少量	良	淡黄灰	淡黄灰	
36	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	ナデ	微細砂少量	良	淡黄	淡茶灰～暗茶灰	塞ノ神 33と同一か
37	I区 VI層	深鉢	–	–	–	半ミガキ	丁寧ナデ	微粒石英やや多い	良	淡橙黄～淡黄	暗灰褐	塞ノ神
38	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	工具ナデ	微砂微量	良	淡黄灰～淡黄褐	淡黄～淡橙	
39	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ～ナデ	粗細砂少量	良	暗茶灰	暗茶褐～淡灰褐	外面：ススク少量
40	I区 VI層	大甕	–	–	–	ナデ	–	粗細砂・小礫少量	良	淡黒褐～暗灰褐	暗褐灰	外面：ススク少量 内面：ややマメツ
41	I区 VI層	深鉢	–	–	–	格子目	工具ナデ	微細砂多量 小礫少量	良	淡黄褐～淡黄灰	淡黄褐～淡灰黄	
42	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ	粗細砂やや多い 小礫少量	良	褐	淡褐～淡灰褐	外面：ススク少量
43	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	–	粗細砂少量	良	淡黄灰～淡橙褐	茶灰～暗茶褐	内面：マメツ
44	I区 VI層	深鉢	–	–	–	粗条痕	粗工具ナデ	粗細砂少量	良	淡褐～茶灰	淡褐	
45	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ	微細砂やや多い	良好	淡黄褐～淡褐	淡茶灰～淡茶褐	
46	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ	微細砂やや多い	良好	淡茶橙～淡黄灰	淡黄灰	外面：ススク少量
47	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	丁寧工具ナデ	粗細砂やや多い	良	褐	灰褐～淡茶褐	
48	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ	微砂やや多い 粗細砂・小礫少量	良	淡橙褐	淡灰黄～淡黄褐	
49	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	–	微細砂やや多い	良	暗灰～淡灰黄	暗褐～淡灰	内面：マメツ
50	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ	細砂やや多い	良	淡橙褐	淡褐～茶灰	
51	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	ナデ	微細砂多量	良	暗茶灰	橙褐	
52	I区 VI層	深鉢	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	角閃石微量 小礫・粗細砂少量	良	橙～淡茶褐	暗灰褐～橙黄	
53	I区 VI層	深鉢	–	–	–	粗条痕	工具ナデ	微～粗砂少量	良	淡褐～暗茶褐	淡褐～暗茶灰	
第15図 54	I区 VI層	壷型?	–	–	–	丁寧工具ナデ	丁寧工具ナデ	微細砂やや多い	良	淡橙褐～淡灰黄	淡褐～淡黄褐	
55	I区 VI層	深鉢	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	粗細砂やや多い	良好	淡橙褐	淡黄灰	
56	I区 VI層	深鉢	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ・ナデ	微細砂・小礫少量	良	淡橙褐	淡橙褐	
57	I区 VI層	深鉢	–	–	–	ナデ	丁寧工具ナデ	微細砂やや多い 角閃石少量	良	茶灰～褐	暗茶灰	
58	I区 VI層	深鉢	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	細砂やや多い	良	灰～淡黄褐	淡灰黄	
59	I区 VI層	深鉢	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	粗細砂やや多い	良	暗灰褐～茶	暗茶褐～暗灰褐	
60	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	粗工具ナデ	微細砂やや多い 小礫少量	良	橙褐	淡黄～淡橙褐	
61	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	条痕	微細砂やや多い	良	茶褐～茶灰	淡黒灰	外面：ススク少量
62	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	工具ナデ	微砂やや多い 粗細砂少量	良好	褐	淡茶褐～褐	
63	I区 VI層	深鉢	–	–	–	条痕	半ケズリ	粗細砂やや多い	良好	淡黄褐～淡橙褐	淡灰黄～灰褐	

表4　出土遺物観察表（4）　縄文土器（2）

No	出土地	器種	法量(mm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	備考
第15図 64	I区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	微細砂やや多い	良好	褐～淡橙褐	暗茶灰～茶褐	
65	I区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	粗工具ナデ	半ケズリ	粗細砂やや多い	良好	橙褐～淡黄褐	淡黄灰～淡茶褐	外面：ス ス微量
66	I区 風倒木痕B	深鉢	424	−	−	条痕	丁寧工具ナデ（平滑）	微細砂やや多い 粗砂・小礫少量	良	淡橙黄～淡橙褐	淡黒灰～淡茶褐	外面：ス ス微量 内面：オコゲ少量
67	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	丁寧工具ナデ	粗細砂やや多い	良	橙～黄褐	暗茶褐～灰褐	内面：オコゲ少量
68	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	丁寧工具ナデ	粗細砂やや多い	良好	淡橙褐～暗灰褐	暗灰褐～茶灰	
69	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	工具ナデ	粗細砂やや多い 小礫微量	良	淡橙褐	淡灰褐～淡黄灰	
70	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	工具ナデ	粗細砂やや多い 小礫少量	良	淡橙褐	灰褐～淡黒灰	
71	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	丁寧ナデ	粗細砂やや多い	良	黄褐	暗灰～淡黄褐	
第16図 72	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	丁寧工具ナデ	粗細砂・小礫少量	良	淡橙褐～淡褐	暗灰褐～淡灰黄	
73	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	条痕～丁寧工具ナデ	微細砂少量	良	淡黄褐～黄褐	淡黄褐～淡褐	
74	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	半ミガキ	粗細砂・小礫少量	良好	桃橙	淡褐	
75	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	丁寧工具ナデ・ナデ	粗細砂やや多い 小礫微量	良好	淡黄褐～淡橙	淡黄～淡橙	
76	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	条痕	粗細砂少量	良	茶橙	淡橙茶～暗灰褐	79と同型式
77	I区 風倒木痕B	深鉢	246	−	−	丁寧工具ナデ	条痕	微細砂少量	良	暗灰	暗灰～淡黄褐	外面：ス ス少量
78	I区 風倒木痕B	深鉢	−	−	−	条痕	丁寧ナデ	粗細砂やや多い	良	淡褐	褐～茶褐	
79	I区 Ⅳa・V層	深鉢	−	−	−	条痕	条痕	微細砂少量	ややあまい	暗褐～暗茶褐	褐灰～灰褐	76と同型式
80	I区 Ⅳa層	深鉢	−	−	−	条痕？	条痕	微細砂少量	良	暗茶褐～茶褐	淡黒褐	
81	I区 Ⅳa・V層	深鉢	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	粗細砂やや多い	良	淡黄褐	淡褐～淡灰褐	
82	I区 Ⅳa層	深鉢	−	−	−	半ミガキ	条痕～工具ナデ	細砂少量	良	淡橙褐	淡黄褐～茶灰	
83	I区 Ⅳa層	浅鉢？	−	−	−	半ミガキ	ナデ	粗細砂少量	良	淡黒灰～暗灰褐	暗灰褐	
84	I区 Ⅳa層	深鉢	−	−	−	粗条痕	粗工具ナデ	微細砂やや多い	良好	明茶橙～橙褐	淡黒褐	
85	I区 V' 層	深鉢	−	−	−	網目撚糸文・縄文	工具ナデ	微細砂少量	良	淡橙褐～淡黄灰	淡褐	塞ノ神
86	I区 排土	深鉢	−	−	−	ナデ	丁寧工具ナデ	粗細砂多量	良	暗褐～暗茶褐	淡茶褐～暗茶灰	外面：ス ス少量
87	I区 撹乱	深鉢	−	−	−	網目撚糸文・縄文	工具ナデ	微砂少量	良	褐～淡灰褐	淡灰黄～暗灰	塞ノ神 内面：オコゲ少量
第17図 89	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	ナデ	工具ナデ・ナデ	粗細砂やや多い	良	暗灰褐～淡茶黄	淡褐～淡茶褐	
90	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	丁寧工具ナデ	丁寧工具ナデ	良	良	淡橙褐	暗茶灰～暗茶褐	外面：ス ス少量
91	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	粗工具ナデ	工具ナデ	微細砂やや多い	良	淡褐	淡黄～淡黒灰	
92	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	ナデ	ナデ	良	良	灰褐～褐	暗褐灰～淡橙褐	外面：ス ス少量 内面：オコゲ少量
93	Ⅲ区 V' 層	深鉢	−	−	−	ナデ	工具ナデ	粗細砂やや多い	良	淡黄褐	褐～暗灰褐	
94	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	微細砂やや多い 小礫微量	良好	淡黄褐～茶灰	淡茶灰～淡茶褐	
95	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	ナデ	工具ナデ	微細砂少量	良好	淡黄褐	淡茶灰～暗灰褐	塞ノ神系？
96	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	76	−	工具ナデ	条痕	粗細砂やや多い	良	淡黄灰～淡黄	淡黄褐	
97	Ⅲ区 Ⅵ層	深鉢	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	良	良	淡橙黄～淡茶褐	淡褐～淡灰褐	

表5　出土遺物観察表（5）　土製品

No	出土地	器種	法量(mm) 径	厚さ	調整 外面	内面	胎土	焼成	色調 外面	内面	備考
第16図 88	I区 Ⅵ層	土器片加工円盤	45	10	ナデ	ナデ	微細砂やや多い	良	淡黄灰～淡茶褐	淡灰褐	頸部使用 外面：ス ス微量

表6　出土遺物観察表（6）　石器・石製品（1）

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	石材
第18図 98	I区 Ⅳa'層	石鏃未製品	22	17	6	2	チャート
99	I区 Ⅳa'層	石鏃	21	13	4	1	安山岩
100	I区 V'層	石鏃	17	16	5	1	黒曜石
101	I区風倒木痕B	石鏃	16	(14)	3	−	黒曜石
102	I区風倒木痕B	石鏃	16	14	2	−	黒曜石
103	I区 V'層	石鏃	20	(16)	4	1	チャート
104	I区 V'層	石鏃	(15)	16	3	−	黒曜石
105	I区 V'層	スクレイパー	36	67	8	21	チャート
106	I区 V'層	石鏃未製品	24	16	9	3	黒曜石
107	I区 V'層	石鏃未製品？	35	15	6	2	ハリ質安山岩
108	I区 Ⅳa・V層	2次加工のある剥片	29	26	10	8	チャート
109	I区 Ⅵ層	石鏃	14	15	3	−	黒曜石
110	I区 Ⅵ層	石鏃	13	(12)	2	−	黒曜石
111	I区 Ⅵ層	石鏃	19	(15)	5	1	チャート

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	石材
第18図 112	I区 Ⅵ層	石鏃	20	(13)	4	−	チャート
113	I区 Ⅵ層	石鏃	19	16	3	−	チャート
114	I区 Ⅵ層	石鏃	26	17	4	1	チャート
115	I区 Ⅵ層	石鏃	(24)	18	3	1	黒曜石
116	I区 Ⅵ層	石鏃未製品	15	12	4	−	黒曜石
117	I区 Ⅵ層	石匙	53	25	6	9	チャート
118	I区 Ⅵ層	石鏃	(15)	(19)	4	1	黒曜石
119	I区 Ⅵ層	石鏃	17	(15)	5	1	黒曜石
第19図 120	I区 Ⅵ層	石鏃未製品	21	18	5	2	黒曜石
121	I区 Ⅵ層	石鏃未製品	12	(12)	1	−	チャート
122	I区 Ⅵ層	石鏃未製品	(17)	(9)	3	−	チャート
123	I区 Ⅵ層	石匙未製品？	(23)	(19)	5	2	チャート
124	I区 Ⅵ層	石鏃未製品	28	18	4	3	ハリ質安山岩

表7　出土遺物観察表（7）　　石器・石製品（2）

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	石材
第19図 125	I区 VI層	石鏃未製品	13	14	2	−	チャート
126	I区 VI層	スクレイパー	39	45	8	15	チャート
127	I区 VI層	石鏃未製品	26	17	7	3	黒曜石
128	I区 VI層	2次加工のある剥片	23	36	8	9	チャート
129	I区 VI層	刃器	45	60	6	19	粘板岩
130	I区 VI層	刃器	29	62	9	6	粘板岩
131	I区 VI層	刃器	84	110	27	254	砂岩
第20図 132	I区 VI層	石核	44	26	6~18	17	チャート
133	I区 VI層	石核	42	46	27	55	黒曜石
134	I区 VI層	石核	26	18	14	7	チャート
135	I区 VI層	台石?	394	334	78	16,000	加久藤溶結安山岩
136	I区風倒木痕B	刃器	86	189	47	730	加久藤溶結安山岩（凝灰質）

No	出土地	器種	法量(mm) 長さ	幅	厚さ	重さ g	石材
第21図 137	I区 II層	石鏃	26	18	5	2	チャート
138	I区 II層	石鏃未製品	22	25	4	3	黒曜石
139	I区 II層	石鏃未製品	34	29	13	12	ハリ質安山岩
140	I区 II層	磨製石鏃	(24)	(21)	1	1	粘板岩
141	I区 II層	石核	23	46	11	13	チャート
142	I区 II層	剥片	37	28	9	11	黒曜石
143	I区 風倒木痕A	使用痕のある剥片	25	34	12	8	チャート
144	I区 II層	2次加工のある剥片	36	62	8	24	安山岩
145	I区 排土	石鏃	17	12	3	−	黒曜石
146	I区 排土	石鏃	18	(13)	2	−	チャート
147	I区 排土	石鏃	22	12	4	−	ハリ質安山岩
148	I区 撹乱	石核	21	15	9	3	黒曜石
149	III区 VI層	使用痕のある剥片	30	35	6	7	チャート

第6節　まとめ

痩せ尾根の斜面で土石流も伴う悪条件にもかかわらず、縄文時代早期後半の集石遺構4基と土坑1基を検出した。

縄文土器は、僅かな個体数であるが、押型文土器、手向山式土器、平栫式土器、塞ノ神式土器、轟Ⅰ式土器が継続的に出土した。遺構の構築年代は、平栫式期を主とする極く短期間を想定している。被熱礫や遺物はほぼ全面に散在し、石器製作址等の存在は特定できない。石器や剥片・チップを生み出した敲き石や、生業に大きく関与する石斧は1点も出土せず、長期にわたる居住は無かったと言える。

Ⅲ区の西壁断面の観察では、客土下に重機の爪跡が残っており、Ⅵａ層まで削平されていること、Ⅳｂ・Ⅴ層は畦畔内の一部にのみ遺存していることなどが確認できた。

縄文時代中期以降弥生時代後期までと、古墳時代中期から中世初期まで、中世末から幕末までは断絶があり、今日に至る。各時期の集落本体は、現在の民家が点在する傾斜地鞍部に包蔵していると推定される。

なお、Ⅰ区西壁北端において火山灰分析をした結果、旧石器時代から縄文時代早期にかけて幾度かの土石流があり、当地の地形が形成されたことが判明した。

付　　篇

古屋敷遺跡出土の墨書土器

宮崎産業経営大学　　柴田博子

はじめに

宮崎県えびの市大字東川北に所在する古屋敷遺跡は、古代以降では9世紀から15世紀頃まで継続した遺跡であり、最盛期は鎌倉時代とみられている。この遺跡からほぼ完形の5点と、小破片であるため判読不能な９点の墨書土器が出土した。13点は土師器、１点が内黒土師器で、いずれもおおむね９世紀後半ととらえられている。以下ではほぼ完形の墨書土器を中心に検討したい。

一.「鷹」墨書土器（報告書番号682）

１．出土状況と墨書

この土器は、２間×推定４間に北廂をもつ掘立柱建物（SB-85）の、廂部分の西から２番目の柱穴の底に近い部分から出土した、土師器埦である。体部外面に数箇所の墨書がある。上半の３文字はいずれも正位の記載で、左の２文字は「鷹」であり、欠損部をはさんで右端も「鷹」字のややくずれたものであろう。欠損部周辺にも墨痕があり、恐らく「鷹」字が並んで書かれていたものと考えられる。下半は判読できないが、１文字ないし２文字を書いたようである。

２．「鷹」墨書土器の事例

「鷹」字が土器に墨書されていた例には、以下のようなものがある。

(a)　奈良県平城宮跡259次調査（造酒司南辺・宮内道路）道路側溝出土、土師器坏・底部内面へ墨書、８世紀末～９世紀初頭、「□〔鷹カ〕」

(b)　同出土、須恵器坏・底部外面へ墨書、８世紀末～９世紀初頭、「□〔鷹カ〕」

(c)　奈良県平城京左京三条二坊九坪（長屋王邸東隣）溝出土、須恵器坏or皿（転用硯）・底部外面へ墨書、８世紀、「□／始／始始／女／衣／鷹／□〔鷹カ〕」

(d)　奈良県大安寺旧境内・杉山古墳周濠出土、土師器皿・底部外面へ墨書、８世紀末～９世紀初頭、「鷹□／□〔麻カ〕呂／□／□□／□」

(e)　秋田県秋田城24次調査（外郭南辺部）出土、赤褐色土器坏・底部外面へ墨書、「鷹」

(f)　山梨県笛吹市狐原遺跡・４号竪穴住居出土、土師器坏・底部外面へ墨書、９世紀、「鷹」

(g)　同遺跡・遺構外出土、土師器皿・底部外面へ墨書、９世紀、「□〔鷹カ〕」(1)

出土地は、集落遺跡の例もあるが都城や官衙周辺が目立つ。その背景には、奈良・平安時代における養鷹・鷹狩が王権と深く関わるものであったことが想定される。

３．古代の養鷹

日本列島では、たとえば６世紀の群馬県オクマン山古墳で鷹匠の埴輪が出土していることなどから、遅くとも古墳時代には鷹狩を行っていたことが知られる。その起源を物語る『日本書紀』仁徳

天皇43年9月庚子条には、百済王の一族である酒君が鷹を調習し、その鷹で天皇が狩りをしたとあり、百済伝来の技術とみなされていた。そして701年の大宝律令以降、軍政一般を管轄した兵部省の下に主鷹司が設けられ、狩猟用の鷹・犬の調習をつかさどり、鷹養戸17戸が大和・河内・摂津国におかれていた(2)。この中央政府の主鷹司は、殺生禁断の趣旨から8世紀代にたびたび停止されたが、9世紀には鷹飼10人と犬が天皇直属機関である蔵人所におかれることになった(3)。

これら朝廷の鷹は「五畿七道諸国年貢御鷹」とあるように(4)、諸国からの毎年の貢上によって集められたものであった。天平10年（738）『筑後国正税帳』には、「貢上鷹養人参拾人」と「貢上犬壱拾伍頭」の、6月1日から9月29日までの147日間の食稲が計上されている。しかも同年の『周防国正税帳』の10月4日に、大宰府から京に向かう「進上御鷹部領使」として筑後国の介と従者、そして「持鷹二十人」と「御犬壱拾頭」が周防国を通過した際の食稲が計上されており、筑後国で調習された鷹・犬から選ばれて大宰府進上の「御鷹」となったことが分かる。これについて弓野正武氏は「時期的には五月頃に巣下しされた鷹子が（筑後）国衙に集められ、狩の季節を迎える前に調習が終って、長期の運搬にも耐えられるように仕上」げられ、「鷹養人三十人」は鷹の調習にあたった人物、「持鷹二十人」は1人が鷹1羽を携えていたものとみなされる(5)。なお「鷹養人」の食稲「人別二把」は、多祢島人や防人の4把より少なく、俘囚と同じであることから、彼らの身分の低さが推察されている(6)。このように奈良時代から国で鷹を飼育・調習して朝廷に貢上するという体制が確認できる。天禄元年（970）に成立した『口遊』には、「八月十六日甲斐国、八月十二日信乃、八月十三日下野国、八月廿五日陸奥、八月廿九日出羽国、九月十日能登、九月十日越後国、九月十三日安芸国、九月廿四日大宰府、〈謂之貢鷹期〉」とあり、10世紀後半にも毎年の貢上が大宰府からあるべきとされていた。なお弓野氏は、伊賀国で所領四至を示した文書の内訳に「鷹巣」が掲げられている事例から、「国衙には国内各地の鷹巣を掌握し、鷹栖を保護し、鷹子を集める体制をつくって、鷹養人を置いていたであろう」と指摘されている(7)。

国が鷹を飼育していたのであるから、各国において国司自身が養鷹・鷹狩を行うこともあった。『万葉集』巻17には、天平20年（748）越中守であった大伴家持が越中国射水郡にて獲た鷹に大黒と名づけ、よく雉をとる鷹であったのに、逸したことなどを詠んだ長歌と短歌が収載されている。また延暦18年（799）、尾張国海部郡主政の刑部粳虫の告発によると、尾張国の権掾である阿保広成がほしいままに鷹・鷂を養い、海部郡少領尾張宮守に猟をさせていたという(8)。

鷹狩は、弓矢で鹿や猪を狩りするのとは違って、支配者の遊猟であり、国司であっても天皇の許可が必要とされていた。神亀5年（728）聖武天皇は、思うところがあるので養鷹をやめるが「天下の人もまた養うことなかれ」と禁じて後の勅を待つように詔し(9)、宝亀4年（773）光仁天皇は京畿内七道諸国に対して「鷹を養うことは先に既に禁断」してきたが、京畿諸国の郡司百姓および王臣子弟が、特別の許可を得たと詐称し、あるいは勢力ある侍臣の威を借りて、鷹を養い鷹狩していることを指摘し、重ねて厳禁する勅を出している。許可される者は、大同3年（808）に親王・観察使以上・六衛府次官以上と示され、太政官から公験が支給されることになっていた(10)。

9世紀に入っても禁令は繰り返し出されており、貞観元年（859）に畿内・畿外諸国司が鷹・鷂を養うことを禁じ(11)、貞観８年（866）にも「五畿七道諸国司庶人」に、ほしいままに鷹・鷂を養うことを禁じている(12)。これらの度重なる発令からすると、９世紀代、国司クラスの官人層が無許可でしばしば養鷹・鷹狩を行っていたことが容易に察せられる。

長久年間（1040－1044）に成立したとされる『法華験記』第113話には、鷹を取って陸奥国へ献上し、その価直を得ることで生計をたてていた男の説話が見える。また天暦2年（948）出羽守から関白太政大臣藤原忠平のもとへ送られていた若鷹を、忠平は朱雀上皇へ献じており(13)、10世紀半ばには贈答品となっていた。このように国司（受領）を通じて鷹を入手するルートとともに、中央貴族がみずから使者を遣わして直接求めることもあった。延喜7年（907）に成立した『藤原保則伝』には、元慶３年（879）保則が出羽守となった頃、「権門子、年来求善馬・良鷹」むこと、愚朴の民はこれを告発せずただ要求に従っていると叙述されている。

4．南九州の養鷹

古代日向国における養鷹の記録は残されていないものの、弓野氏は前述した天平10年の鷹について「必ずしも筑後国内のみから徴収されたと考える必要もなく、大宰府管内諸国で巣下しされた鷹子が、京進に際して筑後国に集められ、同時に調習されたとみるべきであろう」と述べられる(14)。

日向国ではないが、天平8年（736）の『薩麻国正税帳』には阿多郡少領に「薩麻君鷹」という人名がみえる。また『和名抄』には大隅国肝属郡と薩摩国阿多郡にそれぞれ「鷹屋郷」があることから、「鷹屋」は鷹を飼育する小屋を意味するとし、両国には「官有の「鷹屋」が置かれた」とみなされ、さらに鷹狩には犬を伴うが、『新撰姓氏録』右京神別下に「阿多御手犬養」氏がみえることなどから、「律令国家体制成立以前に鷹・狗・鵜・鶏・猪は、大隅・薩摩の隼人、肥前・肥後・日向の肥人等によっても飼養されていた」と、７世紀にさかのぼって養鷹と南九州との関連を指摘する秋吉正博氏の見解もある(15)。

そもそも中央アジアの騎馬民族にはじまったと目される鷹狩りは(16)、少なくとも技術導入の初期には畜産技術との関係が想定されよう。日向国は、７世紀初めに「馬ならば日向の駒」と歌われ(17)、『延喜式』（兵部省）での馬牛牧の数は肥前国と並んで全国一であった。『口遊』にもみえる大宰府からの年貢の背景には、日向国においても、国衙が鷹巣を掌握し鷹子を集める体制を有し、また「鷹養人」や鷹を取る人がおり、さらには国司あるいは大宰府などの有力官人が私的に養鷹・鷹狩したり、貴族から鷹を求められることもあったと想像される。「鷹」墨書土器の事例数は、今後の発掘調査と集成の進展により増加するであろうが、これまで管見に入った集落遺跡出土例(f)(g)が甲斐国であることは、貢鷹国であり、同時に貢馬国でもあって、興味深い。

古屋敷遺跡では緑釉陶器や越州窯青磁も出土していることからも、一般の集落というよりは、小規模であるが有力者の宅と考えられる。「鷹」墨書土器からは養鷹などとも関わった、国司や大宰府官人に仕える者、あるいは『藤原保則伝』にみえるような中央貴族に仕える者などが、可能性として想定できるように思われる。

二．SK-378出土墨書土器（報告書番号2570～2575）

１．出土状況と墨書

長さ約１m・幅約50cm・検出面からの深さが15cmの土壙（SK-378）の西端で、口縁部を合わせた形で３組6点の土器が出土し、そのうち２組４点に墨書がみられる。

まず2571・2574の組は、蓋に転用されている高台のついた土師器皿の体部外面に、「ω」あるいは「３」のような墨書がある。筆記の向きは明らかでなく、漢字のくずれたものとすれば倒位の「山」の可能性がある。身の土師器埦の体部外面にも薄く墨書が残るが判読できない。あるいは蓋と同じ墨書だったのかもしれない。また2572･2575の組は、蓋に転用されている土師器埦の体部外面に「∋」のような墨書がある。2571と類似の文字あるいは記号であり、倒位の「山」の可能性がある。身の内黒土器埦は体部外面に正位で墨書がある。「佛」のつもりかと思われるが、「伴」の可能性もある。いずれも稚拙な筆記であり、文字に熟練した人物によるものとは思われない。

これら３組の土器内には土が流れ込んでいただけで、肉眼で見える遺物は残っていなかったが、何らかの有機物が入っていた可能性はある。土壙西端の掘り形に接していた2570･2573の１組を除いて、他の２組４点は床面より浮いた状態であったことから、これらは、土壙墓を蓋していた木の板の上に置かれていたか、木棺墓の上に置かれていたなどの可能性が想定される。なお遺構の規模から、被葬者は幼児か小児と考えられている。

２．合わせ口にされた供献墨書土器の事例

墓への供献土器に墨書がなされている事例、また口縁部を合わせた形で墨書した坏・埦を埋納した事例は、宮崎県内では本例が初めてである。後者の例には地鎮や陰陽道祭祀と考えられるものがあり、それらについては近年、鹿児島市横井竹ノ山遺跡出土の墨書土師器から検討が加えられている(18)。一方、埋葬儀礼にともなって口縁部を合わせた墨書土器を供献しているものとしては、たとえば鹿児島県内に以下の事例がある。

(h) 鹿児島市谷山弓場城跡出土。遺構は長径93cm・短径83cm・深さ33cmの楕円形の土壙で、中央に須恵器壺を立て、その蓋には高台部分を欠損した土師器皿を用い、東側に口縁部を合わせた形で１組２個体の底面ヘラ切り仕上げの土師器埦が置かれていた。蓋に転用された皿を含め３個体とも、体部外面に正位で、「大吉」と推定される墨書がある。９～10世紀のものである(19)。

(i) 吉田町牧遺跡出土。遺構は長径100cm・短径80cm・深さ60cmの楕円形の土壙で、内部には木炭片を混えた黒色の土が詰まっていた。中央に須恵器壺が置かれ、蓋には土師器坏が転用されている。壺の周辺に、身と蓋の対になって６組12個体の土師器坏が配置されていたようである。このうち身として用いられた４個体の体部外面に「大」の墨書が、１個体にも確かではないが「祀」のようにもみえる墨書がなされているとのことである。９世紀のものである(20)。

これら２例は骨蔵器にともなう供献であった。このほか、合わせ口ではないが、金峰町白樫野遺跡では骨蔵器埋納土壙の四隅に「山」と墨書された土師器坏が正位で置かれていた(21)。また墨書は無いが、えびの市役所田遺跡では、土師器の坏と皿が口縁部を合わせた形で骨蔵器そのものとして

用いられた例がある(22)。熊本市黒髪町遺跡群第２次調査区で確認された９世紀代の土壙墓１基の内部には土師器埦５点と須恵器坏１点が供献されていたが、この墓に近接する小穴２基にはそれぞれ土師器坏２点が合わせ口にして埋納され、同じ調査区内には底部外面に墨書が認められる須恵器坏１点を埋納した小穴１基が確認されている(23)。熊本県宇土市の田平遺跡でも、土壙墓の東端に、墨書はないが、11世紀前半代の内黒埦２個が口を合わせた形で出土しているとのことである(24)。

これらの具体例をみると、墓に供献された土器には、合わせ口にする場合とそうでない場合、墨書をする場合としない場合の、さまざまな組み合わせがある。そのなかで合わせ口にすることと墨書することにどのような積極的な意味が見い出せるのか、残念ながらまだ定見がない。

SK-378出土墨書土器は釈読が困難であるが、「ω」を「山」とすれば文字は白樫野遺跡と共通してこよう。また土器を合わせ口にすることに『宇治拾遺物語』にみえるような陰陽道の祭祀を認める材料は、上に紹介した墓に関してはみあたらない。(h)(i)の例からしても、埋葬儀礼の執行には、むしろ下級の僧を想定するほうが自然であろう(25)。古屋敷遺跡の墓は火葬墓ではないが、もうひとつの墨書はやはり「佛」のつもりで書かれたものと考えておきたい。

おわりに

これまでに紹介したもののほか、古屋敷遺跡では墨書の部分的に残る土師器が９点出土している。1191は「形」「刑」の偏あるいは「型」の上部の可能性などが考えられるが、確定はできない。2118は、うかんむりが正位で筆記されていると思われるものの、文字は不明である。このほかは、文字か筆馴らしか、記号であるかも判断が困難な状況である。いずれも流れ込みや遺物包含層からの出土であった。

古屋敷遺跡では、土器への墨書行為は９世紀後半期に限られ、その後は行われなくなるようである。これは同じく川内川右岸に所在し9世紀後半期の多量の墨書土器を出土した昌明寺遺跡の動向と類似している。「鷹」墨書は習書のようでもあり、養鷹・鷹狩と関わりのある有力者の存在がうかがえる。一方、土壙墓の供献土器への記入はきわめて稚拙な筆遣いであり、文字を正確に筆記することのできないような仏教関係者の姿が垣間みえる。なお、底部外面への記入は1点にとどまり、13点が体部外面へ記入されている。「鷹」や「佛」かと思われる文字をはじめ、1191や2118も正位の記入であり、「ω」を「山」字とすれば倒位の記入であるが、後者は蓋に転用しており、各々の使用の向きに合わせて筆記された可能性も想像される。

注

(1)　吉村武彦「出土文字資料データベース」(2002年) を検索した結果である。(a)(b)は奈良文化財研究所『奈良文化財研究所史料第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ』(2003年)、(c)(d)は奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査センター資料No.3　平城京跡出土墨書土器資料Ⅰ（第一分冊)』(2002年)、(e)は秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所『秋田城跡発掘調査事務所研究紀要

Ⅰ　秋田城出土文字資料集』（1984年）、(f)(g)は山梨県「墨書・刻書土器　漆紙文書」（『山梨県史資料編３』2001年）による。

(2) 『令集解』職員令主鷹司条古記釈説所引別記

(3) 『日本三代実録』元慶７年７月５日条

(4) 『日本三代実録』貞観元年8月８日条

(5) 弓野正武「古代養鷹史の一側面」（竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会編『律令制と古代社会』東京堂出版、1984年）136～7頁

(6) 井上辰雄『正税帳の研究』（塙書房、1967年）238頁

(7) 弓野前掲注(5)論文、142頁

(8) 『日本後紀』延暦18年５月己巳条

(9) 『続日本紀』神亀5年8月甲午条

(10) 『政事要略』（巻70糺弾雑事）大同３年９月23日太政官符

(11) 『日本三代実録』貞観元年８月13日条

(12) 『日本三代実録』貞観８年10月20日条

(13) 『貞信公記抄』天暦2年7月3日条

(14) 弓野前掲注(5)論文、137頁

(15) 秋吉正博『日本古代養鷹の研究』（思文閣出版、2004年）54頁、102頁

(16) 橋口尚武「鷹狩り」（大塚初重ほか編『考古学による日本歴史』12、雄山閣出版、1998年）179頁

(17) 『日本書紀』推古天皇20年正月丁亥条

(18) 永山修一「鹿児島市横井竹ノ山遺跡出土の墨書土器について」（『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(67)横井竹ノ山遺跡』2004年）

(19) 鹿児島市教育委員会『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)谷山弓場城跡　上巻』（1992年）および出口浩氏の御教示による。

(20) 河口貞徳「吉田町の遺跡」（『吉田町郷土誌』1991年）

(21) 宮下貴浩「白樫野古代火葬墓と製鉄遺物」（『鹿児島考古』34号、2000年）

(22) 役所田遺跡SK-23内出土（えびの市教育委員会「役所田遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書第32集　長江浦地区遺跡群』2002年）

(23) 熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』5号（2003年）

(24) 宇土市史編纂委員会『新宇土市史　資料編２』（2002年）

(25) 池畑耕一氏は、鹿児島県内における文字の展開に、仏教文化との関連を指摘されている（「南端の文字文化」『九州歴史大学講座』６巻7号、1996年）

宮崎県えびの市、東川北地区における火山灰分析

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

九州地方宮崎県域に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、姶良、鬼界、霧島、桜島、阿蘇など多くの火山から噴出したテフラ（火山砕屑物（さいせつぶつ），いわゆる火山灰）が認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な土層が認められた北岡松地区調査区西壁の北地点および南地点においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、火山ガラス比分析と屈折率測定を行って、土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。

2．土層の層序

（1）調査区西壁北地点

調査区西壁北地点では、下位より亜円礫に富む褐色泥流堆積物（層厚36cm以上，礫の最大径518mm，XII層）、亜円礫～亜角礫に富む褐色土（層厚28cm，礫の最大径33mm，XI層）、若干赤みを帯びた褐色粘質土（層厚18cm，Ｘｃ４層）、黒灰褐色土（層厚９cm）、黄灰色砂層（層厚１cm）、黒灰褐色土（層厚２cm，以上Ｘｂ層）、灰色土石流堆積物（層厚46cm，礫の最大径168mm，IX層）、礫混じり灰褐色土（層厚11cm，礫の最大径４mm）、橙褐色軽石に富む暗灰色土（層厚14cm，軽石の最大径５mm，以上VIIIｃ層）、橙褐色軽石を少量含む褐色土（層厚22cm，軽石の最大径11mm，VIIIｂ層）、礫を多く含む灰褐色土（層厚８cm，礫の最大径４mm，VIIIａ層）、亜角礫に富む灰色土石流堆積物（層厚29cm，礫の最大径208mm，VIIｂ層）が認められる（図１）。なお、VIIｂ層より上位の黒ボク土中に、約6,300年前[*1]に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）が認められる。

（2）調査区西壁南地点

調査区西壁南地点では、IX層より下位の土層を多く認めることができた（図２）。ここでは、下位より褐色泥流堆積物（層厚32cm以上，XII層）、礫混じり褐色土（層厚22cm，礫の最大径４mm，XI層）、黒灰褐色土（層厚23cm，Ｘｃ２層）、暗灰褐色土（層厚13cm，Ｘｂ２層）、礫や砂混じり暗灰褐色土（層厚11cm，礫の最大径28mm，Ｘａ層）、灰色土石流堆積物（層厚16cm，IX層）が認められる。

3．火山ガラス比分析

（1）分析試料と分析方法

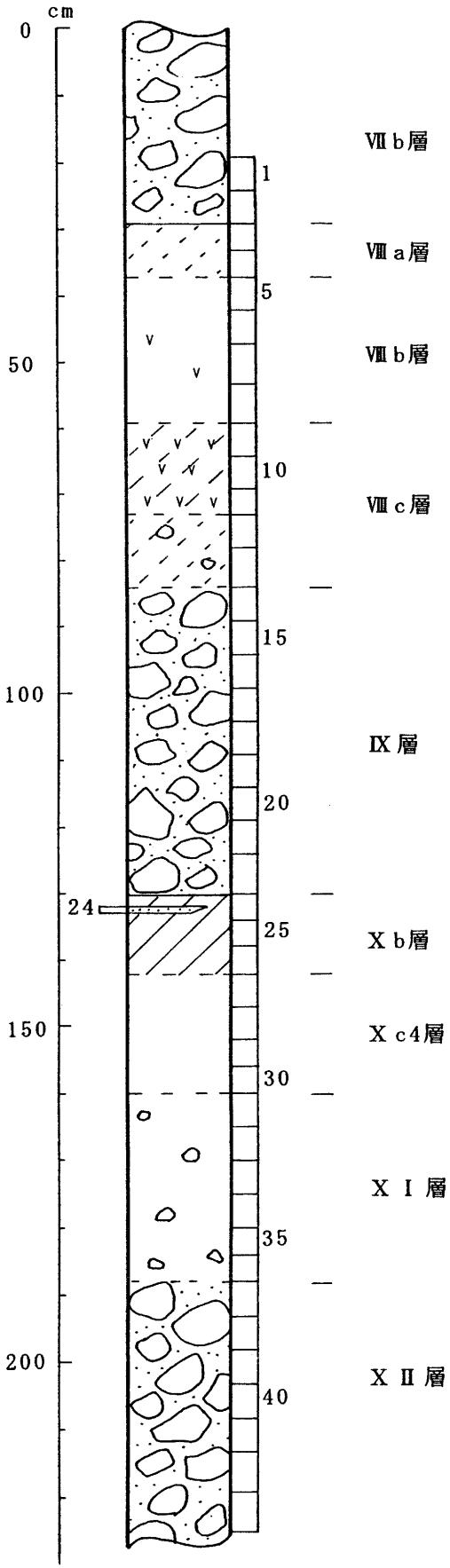
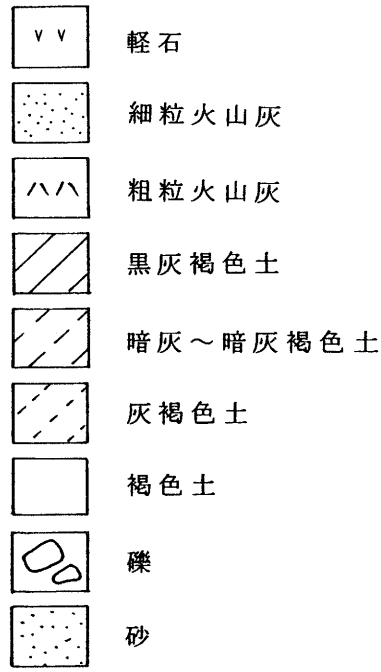


図1　調査区西壁北地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号



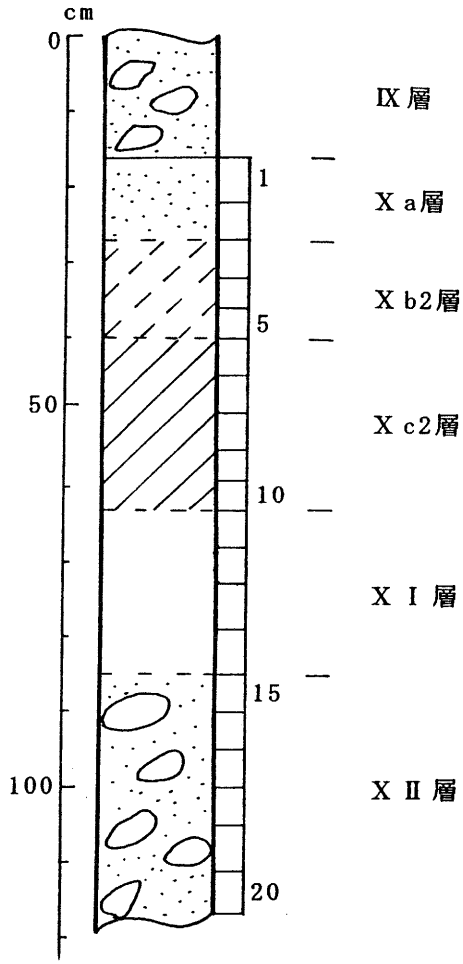


図2　調査区西壁南地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

調査区西壁の北地点および南地点において、基本的に厚さ５cmごとに設定採取された試料のうち、24点について火山ガラス比分析を行い、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準と特徴の把握を試みた。分析の手順は、次の通りである。

１）試料12gを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）80°Cで恒温乾燥。

４）分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。

５）偏光顕微鏡下で250粒子を同定し、火山ガラスの形態・色調別比率を求める。

（２）分析結果

調査区西壁の北地点および南地点における火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図３および図４に示す。またその内訳を表１に示す。

調査区西壁の北地点では、いずれの試料からも無色透明のバブル型ガラスが少量ずつ検出される。試料28（Ｘｃ４層）付近や試料６～８（Ⅷｂ層）付近にその出現ピークがあるように見えるが、これらの層準は礫が少ない土壌で、実際のテフラの降灰層準を示しているか否かについては判断が難しい。

南地点でも、いずれの試料からも無色透明のバブル型ガラスが少量ずつ検出される。ここでは、試料10（Ｘｃ２層）付近にその出現ピークがあるように見えるが、はやりこれらの層準は礫が少ない土壌で、実際のテフラの降灰層準を示しているか否かについては不明な点が多い。

４．屈折率測定

（１）測定試料と測定方法

調査区西壁北地点の試料40、試料24、試料10の３点について、含まれるテフラ粒子を対象とした屈折率測定を行って、指標テフラとの同定の精度を向上させることにした。測定には、温度変化型屈折率測定装置（京都フィッション・トラック社製RIMS86）を使用した。

（２）測定結果

屈折率測定の結果を表２に示す。

５．考察

調査区西壁北地点の試料40（Ⅻ層）および試料24（Ｘｂ層）に含まれる火山ガラスについては、その形態や色調さらに屈折率などから、約2.4～2.5万年前[*1]に姶良カルデラから噴出した入戸火砕流堆積物（A-Ito，荒牧，1969，町田・新井，1976など）や姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）に由来すると考えられる。最下位の泥流堆積

物のマトリクスからATに由来する火山ガラスが検出されたことから、少なくともⅫ層以上の土層は、A-ItoまたはATより上位にあると考えられる。

このことは、南地点のⅫ層においてもAT起源と思われる無色透明のバブル型ガラスが検出されたこととも矛盾しない。

試料10（Ⅷｃ層上部）に含まれるテフラ粒子については、橙褐色という色調をもつこと、その層位、さらに斜方輝石の屈折率などから、少なくとも桜島火山形成以前の姶良カルデラの噴火に由来する可能性はさほど高くなく、霧島火山に由来する可能性が高いと思われる。

ATより上位でK-Ahの下位にあるテフラのうち、霧島火山に起源をもつ代表的なテフラとしては、霧島小林軽石（Kr-Kb，約1.5万年前*1，伊田ほか，1956，奥野ほか，2000）や霧島瀬田尾軽石（Kr-St，約9,200年前*1，井ノ上，1988，奥野ほか，2000）などが知れられている。各々のテフラに含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は、1.705-1.707と1.706-1.710（町田・新井，2003）で、今回の斜方輝石のrangeの中に入る。

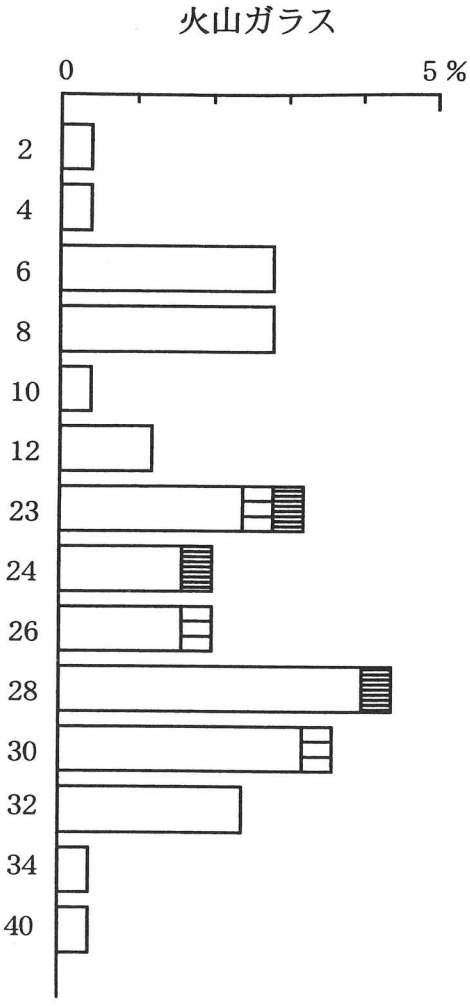
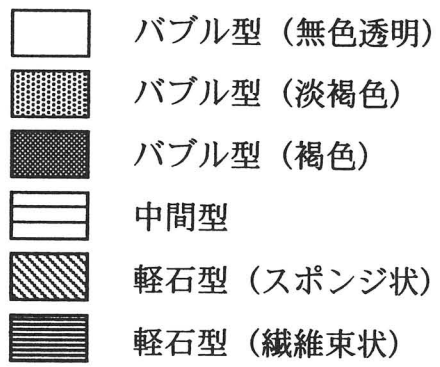


図３　西壁北地点の火山ガラス比ダイヤグラム



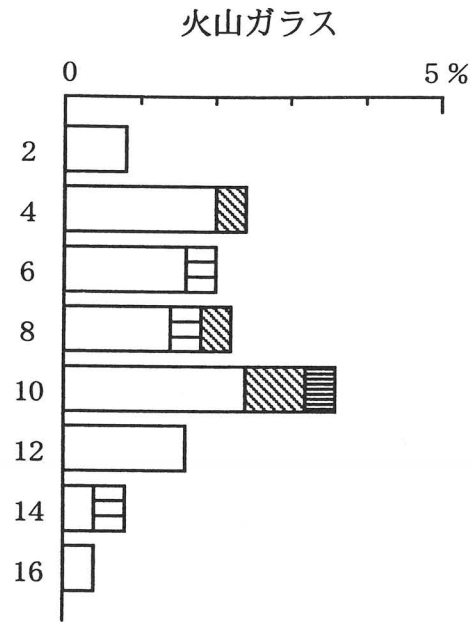


図４　西壁南地点の火山ガラス比ダイヤグラム

また、岩石記載的な特徴は明らかでないが、霧島韓国岳スコリア（Kr-Kr，約1.8万年前*1，井ノ上，1988，Imura，1992，奥野ほか，2000）がATとKr-Kbの間にあるらしい。ただし、Kr-Krの岩石記載的特徴は不明である。さらに、Kr-KbとKr-Stの間に層位があるとされる約1.1万年前*1に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ（Sz-S，小林，1986，奥野ほか，2000）の降灰層準を示唆するような軽石型ガラスや中間型ガラスの濃集は今回の分析で認められなかった。

積極的な根拠には欠けるものの、総合的に考えると、Ⅷc層上部から検出されたテフラについては、現段階ではKr-Kbに同定される可能性が高く、Kr-Stに由来する可能性も若干ながら考えられる。今後、遺跡周辺でのテフラに関する調査分析や、Kr-Krの岩石記載的特徴、さらに今回検出されたテフラとSz-Sとの層位関係の把握が期待される。さらに、腐植質土壌について放射性炭素（^{14}C）年代が求められると良い。

表1　火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
西壁北地点	2	1	0	0	0	0	0	249	250
	4	1	0	0	0	0	0	249	250
	6	7	0	0	0	0	0	243	250
	8	7	0	0	0	0	0	243	250
	10	1	0	0	0	0	0	249	250
	12	3	0	0	0	0	0	247	250
	18	0	0	0	0	0	0	250	250
	23	6	0	0	1	0	1	242	250
	24	4	0	0	0	0	1	245	250
	26	4	1	0	1	0	0	244	250
	28	10	0	0	0	0	1	239	250
	30	8	0	0	1	0	0	241	250
	32	6	0	0	0	0	0	244	250
	34	0	0	0	0	0	0	250	250
	36	1	0	0	0	0	0	249	250
	40	1	0	0	0	0	0	249	250
西壁南地点	2	2	0	0	0	0	0	248	250
	4	5	0	0	0	1	0	244	250
	6	4	0	0	1	0	0	245	250
	8	4	0	0	1	1	0	244	250
	10	6	0	0	0	2	1	241	250
	12	4	0	0	0	0	0	246	250
	14	1	0	0	1	0	0	248	250
	18	1	0	0	0	0	0	249	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：無色透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状．

表２　屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	斜方輝石（γ）
西壁北地点	10	－	1.704-1.710（1.707）
西壁北地点	24	1.498-1.501（1.499）	－
西壁北地点	40	1.498-1.501（1.499）	－

屈折率の測定は，温度変化型屈折率測定法による．（　）はmodeを示す．

６．まとめ

北岡松地区において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、発掘調査で認められたⅫ層以上の土層は、姶良入戸火砕流堆積物（A-Ito）とそれに関係する姶良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前*1）より上位の土層であることが明らかになった。そして、Ⅷｃ層上部で認められたテフラについては、霧島小林軽石（Kr-Kb，約1.5万年前*1）をはじめとする霧島火山起源のテフラに同定される可能性が高い。

註

＊1　放射性炭素（^{14}C）年代．

文献

荒牧重雄（1969）鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物．地質雑，75，p.425-442.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

伊田一善・本島公司・安国　昇（1956）宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告．地調報告，168，p.1-44.

Imura,R.(1992)　Eruptive history of the Kirishima volcano during the past 22,000 years. Geogr. Rept. Tokyo Metropol. Univ., 27,　p.71-89.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科研費自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（研究代表者　荒牧重雄），p.137-163.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79-83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いた　AT火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代．地質雑，99，p.787-798.

奥野　充・福島大輔・小林哲夫（2000）南九州のテフロクロノロジー－最近10万年間のテフラ－．人類史研究，12，p.9-23.

報告書抄録

ふりがな	ひがしかわきたちくいせきぐん
書名	東川北地区遺跡群
副書名	県営経営体育成基盤整備事業東川北地区に伴う東川北地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	えびの市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第41集
編集者	東真一・中野和浩
編集機関	えびの市教育委員会
所在地	宮崎県えびの市大字大明司2146-2
発行年月日	2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
東川北地区遺跡群	えびの市大字東川北字古屋敷・内牧・彦山	9	2005 2006 2007 2014	2000/05/10～ 2001/03/30 2001/04/06～ 2001/07/20 2003/12/15～ 2004/02/16	32,000㎡	県営経営体育成基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
手仕山遺跡	山城	中世	堀切・犬走り状遺構	縄文土器・石器	
古屋敷遺跡	集落	弥生 古墳 古代 中世	間仕切り住居 竪穴式住居 竪穴状遺構 掘立柱建物 土壙墓 溝状遺構	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉・墨書土器・黒色土器・布痕土器・青磁・白磁・青白磁・青花・石器・鉄器	
内牧遺跡	集落	古墳 古代 中世	竪穴式住居 竪穴状遺構 掘立柱建物 土壙墓	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・青磁・白磁・石器・鉄器	
彦山第５遺跡	集落	縄文	集石	縄文土器・打製石鏃	

えびの市埋蔵文化財調査報告書　第41集

東川北地区遺跡群

県営経営体育成基盤整備事業東川北地区に伴う
東川北地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書

本　文　編

平成17年3月

編集・発行　えびの市教育委員会
えびの市大字大明司2146-2

印　　刷　㈲ソーゴーグラフィックス
熊本県人吉市下城本町1426-1